

令和三年（二〇二一）三月二十六日発行
『大倉山論集』第六十七輯抜刷
（公益財団法人 大倉精神文化研究所）

英訳 『古事記』とチエンバレンの訳業に見る
西洋人の日本文化観

松井嘉和

英訳『古事記』とチェンバレンの訳業に見る 西洋人の日本文化観

松井嘉和

目次

はじめに

一 外国語訳『古事記』概観

(一) 最初の外国語訳

(二) 外国語訳『古事記』の現状

二 完訳英訳本の種類とその特徴

三 B・H・チェンバレンの英訳『古事記』

(一) その特徴

(二) ラテン語に訳された箇所

(三) ラテン語使用の理由とその意味

四 チェンバレンとラフカディオ・ハーン（小泉八雲）

五 ラフカディオ・ハーンと『古事記』

六 『古事記』の宇宙生成観 cosmogony と生殖行為

procreation

(一) 『古事記』は閨房の書か

(二) 聖婚 hierogamy

(三) 造物主 deniurge たる岐美二神

おわりに―『古事記』を見る視点の転換

はじめに

筆者は、平成一五年刊行の『大倉山論集』第四九輯に寄稿した「翻訳本『古事記』に見られる翻訳法と原語の理解」なる論文で、「翻訳とは、異なる容器に同一の内容を押し込める作業」で、その容器とは言語体系に留まらず文化の総体をも意味する。つまり、翻訳とは、ある文化の要素を異文化の器に転移させる異文化接触の現場であって、ある言語の

個々の語の意味が当該言語の世界全体の中に置かれてその内容が確定されているのだから、要素の部分だけを転換しても、その部分が受容語の世界の総体つまり文化背景の中でどんな位置を占めているかを確認しないと、正確な意味が厳密には正しく伝えられないことになる。

と指摘した。そして、その翻訳に不可避の難しさは異文化接触とその理解の難しさであり、翻訳はいわばその困難の克服作業であって、翻訳の努力と結果は「それぞれの文化の特徴を際立たせる効果」があつて、「翻訳作業は、原典の言語構造や意味内容に新たな理解をもたらす効果」つまり

翻訳は、両者の相違を際立たせるだけでなく、ある言葉の曖昧模糊として霧に隠れた不明瞭な意味を限定して明確に描き出す効果を生み出すのである。例えば、「隠身」や「独神」という、意味がはっきりと掴みにくい表現も、翻訳の際に訳者が把握して定めた訳語から、かえって言語の意味内容が明確に読みとれる、という効用があることに言及し、その例として、神々が「隠身」を翻訳する前提には一定の解釈があり、訳語はその解釈が鮮明に現れた結果であることを述べた。¹⁾

本稿は、その旧稿の続編で、『古事記』全巻の英訳本、とくに今尚英訳『古事記』の代表的業績とされているチェ

ンバレン Basil Hall Chamberlain (1850-1935, 滯日1873-1911) の翻訳法に焦点を当て、翻訳の課題を鮮明にさせる目的で検討を始めたものである。そして、その作業過程で、チェンバレンの極めて異例な翻訳法の特徴から、二一世紀の今既に顧られなくなっている一九世紀の西洋人の日本文化観とりわけ宗教観が見えてきた。そこで、拙論のタイトルを「英訳『古事記』とチェンバレンの訳業に見る西洋人の日本文化観」としたわけである。

とりわけ、チェンバレンと深い親交のあったラフカディオ・ハーン(註)の「二人は日本解釈者として対立する二大傾向を代表する」存在として、その二大傾向を具に知る好例を提供してくれた。そこで、両者の『古事記』観を対照することによって、西洋人の日本文化観を鮮明に描き出せると思ったのである。

〔凡例〕

- 一 言及した外国文献で既刊の邦訳がある書籍には邦題を「(一)」で、論文には「(二)」で示した。もし邦題がない場合は、参考までに「(一)」で仮訳を示した。
- 二 外国人の場合、本稿の論点の参考になると思われる場合に生歿年を記した。
- 三 引用文中の「・」は、省略箇所を示す。／は、改行箇所を示す。
- 四 本稿の『古事記』の訓は、とくに指定していない場合は、本居宣長全集(筑摩書房)所収の『古事記伝』の訓を漢字仮名交り表記で記している。訓の個所で『神典』とあるのは、大倉精神文化研究所刊行の書のことである。
- 五 言及個所の明示等のために傍線が多用されているが、ルビとの重なりを避けるために左に付した例が多い。とくに注記がなければ、傍線の左右には意味はない。
- 六 先学者に言及した時の敬称の使用が、筆者の感覚に頼るばかりで、恣意的であることは御海容願いたい。

一 外国語訳『古事記』概観

(一) 最初の外国語訳

『古事記』が最初に外国語に翻訳されたのは、何語でいつのことなのか。レヴィ＝ストロース Claude Lévi-Strauss (1908-2007) が言及している。

古事記や日本書紀がヨーロッパの学界にセンセーションを巻き起したのです。．．．まず一八七六年に、イギリスにおける人類学の創始者タイラーがその大要を報告しています。そして、一八八〇年と一八九〇年に、最初の英訳とドイツ語訳が出版されました。⁽³⁾

右の「まず一八七六年」とは、同年三月二十八日、タイラー Edward B. Tylor (1832-1917) の Remarks on Japanese Mythology (『日本神話に関する所見』) と題する講演だとレヴィ＝ストロース自身が注記している。当時英国に滞在中のジャーナリスト馬場辰猪 (1850-88) がタイラーに講演のための情報を提供した。『馬場辰猪全集』第一巻は、タイラーの講演録を On Babab's Translation of KOJIKI (『古事記の馬場の翻訳について』) という題で収載し、その解題には次のようにある。

「日記を通して見たる馬場辰猪」によると、「明治五六年頃倫敦で辰猪と一緒になつた赤松連城氏の話では、赤松氏が『古事記』を読解し、辰猪がそれを英文に書いて、『古事記』の訳文を作つたといふ」ことが記されている。この『古事記』の英訳を見つけることはできなかったが．．．⁽⁴⁾

確かに、その講演録は、次の言葉⁽¹⁾で始まっている。以下⁽¹⁾～⁽⁴⁾の講演録と馬場の発言の引用は拙訳による。⁽⁵⁾

① 馬場辰猪というロンドン在住の一人の紳士が、私の要請に応じて、古事記という日本の重要な古記録の書の

開卷部分を翻訳してくれた。私が今のところ知る限りでは、それはまだ欧州のどんな言語にもなっていない。

② この本の後半部分は、主要内容を構成していて、史的な性格がある。一方、その導入部分は、天地創造の伝説や神々が活躍する物語から構成されている。

その講演録には以下の記述もあり、タイラーの講演が『古事記』の記述だけに基づいていたのではなく、『日本書紀』の記述にも言及していたことがわかる。

③ 日本の固有性は形質的にも言語的にもシナとは異種だった。にも拘わらず、言語的には歴史時代に大規模に日本に移植され、日本の文化の多くがシナ起源あるいはシナの影響下で発展してきた。天地創造の伝説は、根源的な混沌から始まっている。その混沌の中で、女性と男性の要素であるメ女とオ男（シナ語では陰と陽）はまだ分離していなかった。水と空気と地上は混交していて、卵の黄身と白身とが混ざりあっているように、そんな状態は、物質自身が、重い部分は沈んで地表を形成する一方で軽い部分は上昇して天空を形成した時まで続いた。これらの物語すべては明らかにシナ起源である。

赤松 (1841-1919) (G16) が用意した講演の材料は、『古事記』を解説した話だと言う『馬場辰猪全集』の解題の言葉とは異なり、日本神話という枠で語った内容であったのではないか。あるいは赤松の話を英訳した馬場が自分の記憶を入れてタイラーに提供したのか、またはタイラー自身が自分の知識も加えたのか。いずれにせよ、タイラーの講演は、厳密には古事記神話と言うより日本神話の紹介だったのである。それはともあれ、レヴィ・ストロースが言う「日本神話が初めて欧州で知られたケース」に日本人が関わっていたわけである。

タイラーは講演で、日本神話の岐美二神の国生み、黄泉国訪問、須佐之男命の勝さび、天岩戸、八俣大蛇退治の物語を要領よく簡潔に紹介し、その意義について次のように言葉を添えている。

④ 以上の自然物語の主要な主題に加えて、特異な逸話があり、興味を引く考え方や習慣が述べられている。例えば、イザナギの神が妻のイザナミを自分の所に戻ってくるように説得するために妻を訪ね、地下冥界に降って行った時、妻は、「貴方は遅すぎます。私はもう自分の今いる世界の食物を食べてしまった」と答えている。ここには、分離させられた一方の聖霊の食べ物も一度でも食べてしまった者は誰であれ戻ることはできないという興味深い観念（これはニュージーランドでも非常にはつきりと見られることである）がある。さらに、鏡に自分自身を見たときに岩屋戸から出される太陽女神の話があり、その話から日本のシントーの社つまりカミの社（the Shin-to or Kami temples of Japan）に鏡と切り紙（Gohei 御幣）があることが明らかである（フランク氏は私にそれらの御幣はアイヌ人が祭事の際に用いるという興味ある事実を教えてください。それは日本人の起源である祖先とアイヌ人との関係の問題を含んでいる）。

さらに、講演録には講演後の活発な討議内容も記録されている。馬場の質問個所の一部だけを紹介するが、それによって、馬場が資料を提供したことが明白である。

馬場辰猪・私が行った翻訳は、非常に不完全だと言わざるをえないのです。私自身の英語力の不足という理由だけでなく、『古事記』に述べられている言葉の意味について非常に異なった様々な注釈者がいるために、この書の翻訳には多大の困難がありました。オロチと呼ばれ、スサノオによって殺された八つの首をもった大蛇は、その名をもった土地から来た人間であって、化け物ではないと言われています。また、その本で言及されている天上の橋というのは船だと言われているのです。しかし、私は、できるかぎり文字通りに翻訳しました。

では、「一八八〇年と一八九〇年に、最初の英訳とドイツ語訳」とは何だろうか。

一八八〇年の英訳は本稿二（一）で紹介する一九七三年版のチェンバレンの英訳書の序文（四〇頁以下）に「チェ

ンバレンは既に一八八〇年に『古事記』の一部を翻訳している」との記述があり、それに相違ないだろう。

ドイツ語訳は、フロレーンツ Karl Florentz (1865-1939) の『古事記』と『日本書紀』と『古語拾遺』を収載したA四版四五〇ページを超える大著『Die historischen quellen des Shinto-Religion』(『神道宗教の歴史的源泉』)を筆者は知るばかりで、『古事記』は『KOJIKI oder Geschichte der Begebenheiten im Altertum』(『古事記すなわち古代における出来事の物語』)という題で同書の冒頭に収められている。『日本書紀』の部分は一九〇一年に単行本として刊行されている。筆者は一八九〇年の独訳が何かは未特定である。

(二) 外国語訳『古事記』の現状

平成二四年(二〇一二)、古事記撰録一三〇〇年を記念して、奈良国立博物館「古事記の歩んできた道」、同二六年奈良県立博物館「大古事記展」をはじめ、『古事記』に関係した多種多様な催しや書籍が数多く現れた。筆者は、「翻訳本『古事記』」に見られる翻訳法と原語の理解」(『大倉山論集』第四九輯)の末尾の「『古事記』の翻訳の課題」の節で、「暗号解説にも似た作業が必要な『古事記』の言葉の解釈について、わが国において定説がなく、なお課題とされている問題点が、それぞれの訳者の翻訳法と訳語選定の差として現われていて、とくに注の記述にそれが反映している」と述べた。その視点を敷衍すると、『古事記』に興味を感じた世界の人々は、『古事記』をめぐる日本の動勢の影響を受ける現実が見える思いが強くなる。

平成の御代の『古事記』全巻の重訳も含めた翻訳本の刊行状況は、筆者が知り得ただけでも上記の【表1】の通りである。新装版とさらに二一世紀に新たな翻訳が公刊され続けた事実⁷⁾に、私は、『古事記』撰録一三〇〇年を迎えつつあった日本の『古事記』への関心の高まりが海外にも影響した現実を見る思いが強くなっている。

【表1】平成元年以降の『古事記』外国語版一覧（発行年度順）

刊行年	訳語	翻訳者
平成元年・1989	シンハリ語	アリヤシング
平成2年・1990	中国語	周作人（新装版）
平成6年・1994	ロシア語	ピヌス
	ポーランド語	コタンスキ（新装版）
平成9年・1997	フランス語	シバタ（新装版）
平成12年・2000	ロシア語	ピヌス（新装版）
平成18年・2006	イタリア語	ヴィラニ
平成20年・2008	スペイン語	ルビオ&モラターラ
平成21年・2009	セルビア語	山崎 洋
平成24年・2012	ドイツ語	アントニ
平成26年・2014	英語	ヘルト

新装版とは内容に変化なく装幀を改めた再刊のこと。スペイン語とドイツ語版の現物を確認していないが、全巻訳との情報を得た。一方、平成24年（2011）にチェコ語が刊行されたいが、全巻訳かどうか確認できていないため除外した。

本稿では考察の対象外の部分訳も含め、現時点で、『古事記』が翻訳されている言語は、左の通りだと概括できる。

原典からの全巻訳

英語・独語・仏語・露語・伊語・ポーランド語・韓国語・中国語・スロベニア語

英語からの重訳と推定される全巻訳

マジャール語（ハンガリー）・シンハリ語（スリランカ）

部分訳で重訳と思われるもの

タイ語・ルーマニア語・スペイン語・スロバキア語・（チェコ語・詳細不詳）

とくに、英語・独語・露語・伊語・中国語には複数の種類の翻訳があることを確認している。

二 完訳英訳本とその特徴

令和二年の時点で、日本語の『古事記』から直接に全巻が訳された英語版は四種ある。それぞれの特徴の概要を紹介する。

(1) “The KOJIKI, Records of Ancient Matters,” translated by Basil Hall CHAMBERLAIN, first published by the Asiatic Society of Japan in 1883 and reprinted in 1906, 1919, 1932, 1973, Tuttle Edition, Tokyo, 1982, now in print.

初版刊行後の本書について、山口栄鉄氏は、詳細にチェンバレンの業績を追究した書で、

その後、一九〇六年に至って復刻され、さらに一九三二年刊行の第二版にはアストンの手になる補注、そして初版以来刊行された古事記関係研究文献録が加えられ斬新な形となって世に問われる。⁸⁾

と、一九三二年の第二版を紹介し、アストン William George Aston (1841-1911, 滞日1870-84, 86-89) の補注を加えたために、初版とは全く異なる体裁になっていると述べたこの言葉に続いて、さらにアストンが手元に行っていたチェンバレンの英訳について、

第二版の元となったアストンの所蔵本というのは、アストンが後年チェンバレンの『古事記』英訳版に続いて刊行する『日本紀』英訳出版に備えてメモを付していたもので、後年原著者チェンバレンに改訂版に役立てるようにと託されたものである。両「欧米日本学者」の提携になる書ともすべき貴重な一書である。

とその価値を述べている。

今、チェンバレンの英訳『古事記』を入手しようとする。日本の Charles E. Tuttle Co. Inc. が一九八一年出版権を得て翌年に第一版を刊行し、その後、版を重ねた本に出会う。筆者は、一八八三年の初版を踏襲した一九九〇年の第四版とアストンの補注が加えられた改訂新版とを所有している。その改訂新版には刊行年が示されていない。アストンの注が追補されたチェンバレンの英訳新版は、一九三二年に刊行され、その後、一九七三年に香港で一〇〇〇部、Cathay Press Limited から再刊された。そこには、チェンバレンの英訳本刊行の経緯や刊行後の貴重な情報を提供する序文があるのだが、それは、新しい Tuttle 本に見られないので、以下に、全文を邦訳して紹介する。

Transactions of the Asiatic Society of Japan (日本亜細亜協会紀要) に掲載された多くの論文の中で、豊富な注のあるチェンバレンの翻訳 *Ko-ji-ki* ほどよく読まれて引用されているものはない。その翻訳は、刊行以来、西洋の日本研究者の古典となつている。なお、彼は当初は *Ko-ji-ki* とハイフンをつけて書いていたが、“Things Japanese” (『日本事物誌』平凡社東洋文庫・松井注) などの後の著作ではそれを落として *Ko-ji-ki* と表記した

チェンバレンがいつどのように日本の起源と歴史が書かれた八世紀の史料に興味を抱き、西洋の言語で全編が理解できる翻訳本の制作者となろうと思ったのかは知られていない。だが、自身が読んだ日本の書物、その中には多分『古事記』もあつただろうが、例えば、アストンの “Grammar of the Japanese Written Language” (1872 [書言言葉日本語文法]) やサトウ Ernest Mason Satow (1843-1929) が「日本亜細亜協会紀要」に発表した “The Revival of Pure Sintau (1875 [純粹神道の復活]) のような西洋人の業績群を読む中から『古事記』の存在を認識してゐたに違ふな。一八七八年十一月二日、the Asiatic Society of Japan (日本亜細亜協会) の東京での会合で、チェンバレンはサトウが “Ancient Japanese Ritual” (『古代日本の儀礼』) と題された一連の論文の最初の部分を読み上げて『古事記』*Ko-ji-ki* と『日本紀』*Nihongi* に言及して次のように言うのを聞いた。「これらの

書物が原典の日本語の中だけに閉じ込められているかぎりには、その言語の難しさがあって、日本文学のこの部分に特別に注意を向けたごく少数の研究者が扱えるだけになる。その言語が示している困難さのために、殆どの人々が、それを徹底的に探究する時間を見つけない希望がもてなくなっている。従って、非常に重要な文献を可能な限り厳密に翻訳することによって、古代信仰 (shinto) とその儀礼の内容を探求者が直接に学ぶことから遠ざけている主要な障害を取り除く努力は非常に有益なのである。個々の専門家がほんの僅かの部分しか知ることができないならば、その事実から適切な推論を導き出し、それを証明するに相応しい史料を集積するという必要性のある作業に貢献することになる」。

もし、このサトウの表明が、チェンバレンの『古事記』翻訳を直接に促さなかったとしても、少なくとも翻訳の成果は望ましく有益だという認識を強化させたに違いない。ちなみに、当時、協会の中では『古事記』の価値に関しては人々に一致した見解はなく、ブラウン Samuel Robbins Brown 師などは「精読する苦勞に釣り合う報いはない」と考えていた。一八七三年の亜細亞協会の会合で表明されたように、ブラウン師はその理由を次のように述べていた。「森羅万象の起源を考えるのだと公言することは無神論者であるとの表明になる。なぜなら、原初の物質の本質は創造者を必要とするからだ。『古事記』が扱う宇宙生成論は幼稚で非哲学的である。古事記は道徳体系は何も含んでいないし、倫理的問題の議論も儀式の方法の指示もないし、人を崇拜の対象として向かわせるいかなる神も神々 (any god or gods) も述べていない。その上、古事記は、口承で聞き取ったすべての伝承 (verbatim et literatum) を復唱できた超人的な記憶力をもっていた無学な女性の作品だと日本の研究者たちからも認められている。従って、その本の信憑性は信用できる基盤もなく文献批判もされていないのだから、その存在資格すら危うくなっている。」

チェンバレンは、遅くとも一八八〇年には『古事記』*Kojiki*の一部分を翻訳していた。同年にロンドンで刊行された *The Classical Poetry of the Japanese* (『日本人の古典詩歌』⁹) の中の補注で解説をするために必要だったのだ。二ページに満たない英語にまとめられた中には、岩屋戸の中に逃れて隠れた太陽神がどのようにしておびき出されて出てきたかが語られている。彼はその本のタイトルを *Kojiki* とローマ字表記し、太陽神を *the Heaven-Shining-Great-August-Deity* (天の輝く偉大で高貴な精霊) と翻訳した。だが、後の完訳版では *the Great and Grand Goddess Amaterasu* (優れた偉大な女神アマテラス) と呼んでいる。すでに完訳されたこの変更がまだ完成途中の原稿でなされたとしても、根拠のある修正であった。

全巻翻訳の開始について言えば、それまで、短編長編に限らず彼の仕事の初期の刊行物は一八七八年に三編、七九年に二編そして八〇年に三編、それに続いて八一年にはわずか一編しか見えなもので、彼は、少なくとも一九八〇年の後半から八一年に入るまで、『古事記』の翻訳に多くの時間を割いていたのだろう。翻訳は数ヶ月でできる仕事ではないことは明らかなのだから。

その仕事は、一八八二年、チェンバレン三二歳の春に完成した。日本滞在と日本語学習が九年に満たない時で、その間の八年は東京の帝国海軍兵学校で英語と数学を教えていた。それまでの業績に加わった英訳『古事記』は、彼を日本研究の先輩格であるサトウ Satow やアストン Aston の仲間入りを可能にしたのである。

日本亜細亜協会によって英訳『古事記』が刊行されるに至った背景は記録されていない。考えられるのは、チェンバレンが *The Classical Poetry of the Japanese* を出版したロンドンの会社 *Trübner & Company* に英訳古事記の話をもちかけた可能性があり、その長さと同販売見込みが理由で断られた。その結果、協会にとっては、創設以来、単著への最大の支出となった。

「チェンバレンは、一八八二年四月一二日に東京の商工会議所で開かれたパークス卿 Sir Harry Parks が列席した会合で、五章の序文の最初の四章を読み上げた。チェンバレンは、序章全体を紹介しようと考えていたが、Japan Weekly Mail の四月二二日の記録によれば、「ハリー卿は、チェンバレンが一時間半もの間読み続けているにも拘らず、聴衆に満足を与えていたことに気づき、まだ読まれていない残りの部分は、次の会合で発表すべきだと述べた。ハリー卿は、控えめな態度で、チェンバレンの発表にどんな賞賛の言葉を言っても言い尽せないと考えた。彼は、発展の初期段階にあった日本の古代史や思想や社会の条件に関する深い洞察を聴衆にもたらずチェンバレンの労を惜しまない研究、何よりも分析能力に大きな感激を得たのである」。五月一〇日の亜細亜協会の定例会で最後の部分を読み上げたチェンバレンは、七月二一日の協会の年次総会で翻訳の概要を提出した。

その翻訳は、一八八三年の春に亜細亜協会紀要の第一〇号の付録として、本文三六九ページに補記七十五ページのペーパーカバー版で刊行された。横浜の印刷所 R. Meiklejohn & Company に二月まで経費の弁済ができなかった。刊行費用は、七八八円六三銭で、一八八三年七月二〇日の年次総会に出された会計報告では、収支残高は六七〇円六六銭だけであった。印刷部数は不明だが五百部以上はなかっただろう。その数は、協会の中で配布するには充分で、その後二〇年間の需要を満たす数だった。付録が一九〇六年に再版されたときには、新しい形式となり、ページも組み替えられた。初版の表題と見開きで印刷されていた「神話時代の日本」として知られた「世界」という地図が削除されたが、大阪在住の N. Walter 師によってまとめられた四六ページにわたる索引が追加された。作品の信用を高める試みは成功していなかったが、一九二〇年に再版されるはずだったという記録がある。海外の取扱業者の手元の以外の本の在庫は、一九二三年の地震の際の火災によって無くなってしまったようだ。

新しい版は最初のチェンバレンの原稿の完成から五〇年後の一九三二年に刊行された。新しいとは Aston の補注が加えられているからである。それは、日本亜細亜協会の許可と激励を得た J. L. Thompson & Company (Retail) Ltd. という薬局の仕事の他にグリフィス Harry John Griffith の編集の指示の下で日本に関する本を編集販売する仕事を行っていた神戸の英国の会社から公刊された。H. J. Griffith 自身は学者志望だった人物 (manuque) で、西洋の言語で書かれた極東とくに日本に関する稀覯本の収集家でもあった。「ときには鉛筆でときにはインクで、余白の周囲あるいは行間にすら書かれていた」アストンの補注は、チェンバレンが日本亜細亜協会で発表した原本の中に書き写されていたが、その原稿は、第二次世界大戦のときに協会の図書館への焼夷弾の爆撃による火災で失われてしまったようだ。表題のページに「新しい版の作成に利用するため、一八九二年五月十三日、Devon の Seaton へアストンが私に渡した彼の注釈の付された『古事記』の複写」とチェンバレンは書いていた。アストンは、一八八九年に肺臓の問題で英国の領事業務からの引退を余儀なくされ、Devonshire に居を構えた。そこへチェンバレンが訪ねている。アストンの補注は、すべて新しくタイプ印刷する原稿に挿入するためにグリフィスがタイプ打ちをした。その注は、各記述の最後に W. G. A. というイニシヤルによって、チェンバレンの脚注と区別された。当時は、Peer School にいた次田潤 (Uru Tsugita) 教授から一八八三年以来刊行された『古事記』を扱った本の一覧表を入手したグリフィスは、一九〇六年版の索引を知らなかったか不満だったのか、ともかくも、四五ページにわたる索引を編集している。この版は、一七〇〇部発行され、その中の一〇〇部は *lorinoko paper* 鳥の子紙で作られてナンバリングされ、七部は白色の上質の羊皮紙で作られた。第二次世界大戦が始まってから、L. Thompson & Company が日本の外国人財産管理令によって接収されたのかあるいは自ら精算したのかは知られていないが、市場に出る本書は、初版本や一九〇六年版よりも

ずっと珍しい本となっている。

発行者の解説つまり序文が入れ替えられている他は、この写真印刷版は、一九三二年の神戸版のすべてが再現されている。次田教授の一覧より以降の『古事記』に関する日本の史料について知りたい読者は、K.B.S. (国際文化振興会) の *Bibliography of Standard Reference Books for Japanese Studies* (『日本研究のための標準的資料目録』) の第六卷の (B) 文学の第一部⁹ さらには第三部の歴史の第一章の第二節と一九六二年と六三年の第二部、古事記学会の年刊誌『古事記年報』を参照されたい。

戦後刊行された英語の資料で、それぞれ異なる関心と重要度のある刊行物は以下の通り。¹⁰⁾

- Kidder, J. Edward, *Japan Before Buddhism*. London & New York 1959
- Muraoka, Tsunetsugu, *Studies in Shinto Thought*. Tokyo 1964
- Philippi, Donald, *New Interpretations of KOJIKI Mythology* 1965
- Philippi, Donald, *This Wine of Laughter: A Complete Anthology of Japan's Earliest Songs*. 1968
- Vannovsky, Alexander, *Volcanoes and the Sun* 1960
- Yaku, Masao, *The KOJIKI in the Life of Japan* 1969
- Young, John *The Location of Yamatai* 1957

現代の日本研究における言語学と解釈に有用な要素は、Philippi, Donald がまとめた比較的短い序文と索引に代わる膨大な語彙集が担っている。チェンバレンがもたらした恩恵は、『古事記』、『日本紀』、その他の古代の記録を一つの連続した物語の中で総合的に分析しようとした労作とも言えるウイラー Post Wheeler の “The Sacred Scripture of the Japanese” (*New York* 1952 [日本人の聖典]) の中の謝辞に窺える。チェンバレンに大

大きく依存した翻訳かどうかわからないが、Yaichiro Isobe, “The Story of Ancient Japan, or Tales from the Kojiki” (磯部彌一郎〔古代日本の物語すなわち古事記物語〕東京・San Kaku Ssha 三角社・1928) は、Shibukawa Genji (澁川玄耳) が現代語で編集した『古事記』の一部の意訳である。また、標準的とは言えない英語と評されているが、日本人の井上俊治による全巻の英語訳があり、一九五八年以来何度も謄写版印刷やタイプ印刷や写真オフセット印刷で刊行されている(福岡、日本習字協会)。

日本亜細亜協会委員会は、協会創設一〇〇周年の一九七二年に、一〇〇年記念事業としてチェンバレンの長い問絶版だった古典的な作品を複製することが、協会とその最も卓越したメンバーの一人である彼を讃えることだとし、全員の同意を得て企画された。広く歓迎されるだろうと確信している。

以上の FORWARD 序文と題して冒頭におかれた文章は、山口栄鉄氏が「冒頭の版元のメモ」と記しているように、The Editor とあるだけで誰が書いたのか無記名である。

チェンバレンの自序は「Translator's Introduction」の題の長大な論文で、初版刊行の早くも五年後の明治二十二年(一八八八)四月に『日本上古史評論 全』と題して飯田永夫の邦訳により刊行され、翌年に再版されている。同書には、チェンバレンの見解の所々に田中頼庸、木村正辭、小中村清矩、黒川眞頼、栗田寛、飯田武郷の六氏の批評が頭注にあつて、興味が掻き立てられる。

(一) “KOJIKI,” translated and annotated by Shunji INOUE, Shindo Tenkokyo, Yamaguchi-ken, 1958.

本書について筆者は、次の夜久正雄氏の述懐を紹介したことがある。

フィリップス氏の英訳(一九六八)よりも前である。したがってチェンバレン訳(一八八二、一九〇六)だけが

参照されたであらうから、大変な労作であったにちがひない。発表するのに、謄写版でするほかなかったのであろう。恐らく自筆の謄写版刷であったにちがひない。戦後私も自筆謄写版印刷の歌集を出した思ひ出があるので身につまされた。¹²⁾

本書にも序文があるが、さほど長くない。本書の概要を知るに参考となる部分だけを邦訳して紹介する。

わが人種の信仰である神道思想の基礎を作った日本の最も貴重な『古事記』全巻の英訳本。私の如き高齢で研究者でもない者の翻訳は最高度に難しい問題だ。しかし、日本とその国の人々の現在の情況を考えると、たとえ正確さに欠けるところがあっても、この翻訳を通して、日本と日本人が達成させた神秘的意義の保持とスメラミコトいわゆる皇帝を中心を置いた特異な国家の永久の光が強調されていることも認識するだろう。そして、神道は教条主義的でも排他的でも強制的でもなく、神々の古道（かむながらのみち）の民族の実践の道であり、日本人は、普遍的調和、世界の平和、全人類の繁栄に貢献する聖なる使命をもっていることを知るだろう。

本書について、右に紹介した一九七三年のチェンバレンの英訳本の編者の序文には、「標準的とは言えない英語と評されている」との評がある。それでも、その本書刊行後一五年に、日本人による英訳本として言及してくれた外国人があつたことは、訳者として以て瞑すべきことではないだろうか。

ワルシャワ大学のコタンスキ Wiesław Korąński (1915-2005) も、ポーランド語訳『古事記』の序文に「欧州の言語に翻訳された古事記」という節を設け、本書を取り上げた。その評価を原文のポーランド語から要点を紹介する。

福岡で謄写版刷りの井上俊治の筆になる翻訳がある。初版は一九五八年で、チェンバレン以降の新しい英訳が現れる一〇年近くも前のことである。それまで、ヨーロッパでは、詞華集のような形で『古事記』の部分的な良質の翻訳がいくつか出版されていたが、全訳が企図されることは全くなかった。今、私の手元には一九六六年

に刊行された改訂第八版がある。

翻訳を決定した理由は序文で意外な程に率直で明快に表明され、訳者の善なる鞏固な意志が示されている。だが、彼の信念が研究者に十分に理解されるかは疑問である。残念なことに、翻訳の大部分は明らかに「自由翻訳」で、時折、内容が自在に言い換えられていたり一種のエウヘメリズムによって潤色されたりしている。井上は、テキストを異国人の利便に留意して翻訳したと明言する。その一方で、理解の助けとなる注解はわずかでである。時々堅固な神道信仰家の情熱の虜になっていると感じさせられる。結局、井上の翻訳は『古事記』に対して現代の日本人がどのように見ているかという視点からは興味が湧くが、『古事記』のテキスト自体の研究方法に資する史料とは言えない¹³。

(11) “Kojiki,” translation with an introduction and notes by Donald L. Philippi, University of Tokyo Press, 1968.

翻訳者フィリップは、一九五九〜六一の二年間、國學院大學で『古事記』の研究をし、チェンバレン以来八五年ぶりの本格的な完訳を達成した。同書の特徴は、例えば、固有名詞は甲乙二種ある母音の区別も表示し、名称は物語の中でその名の主人公が担っている役割が暗示されるとする立場から、名称に隠された意味を巻末に詳しく説き、さらに、随所でチェンバレンが提示した問題点に触れているなど、翻訳という作業を通じた註釈書という点にある。歌謡も、チェンバレンにはない句毎の改行など、言葉の置き換えだけではなく、原典の雰囲気伝えたいという意図が窺える翻訳となっている。スロバキア語やシンハリ語あるいはマジヤール語（ハンガリーの国語。同書はオーストラリアで刊行）など様々な訳本の種本ではないかと推定される。その学術的な精緻さが、チェンバレンが今でも再刊

されているのに、本書が再版されない原因になっているとしたら、残念でならない。

チエンパレンの序文より短いが、彼の序文もテーマ別に設定された問題が精緻に論じられている長文である。以下にその分類の見出しにつづ、フリッパイの翻訳姿勢が推察できる材料を提示するだけに留めて、要点をまとめた。

生活に革命的变化があっても昔の考え方や態度や信仰が生き生きと保持されている例を日本は示している。その日本の始まりの研究には『古事記』を無視することはできない。訳者は、言葉の意味を明らかにして、古代日本の血統、社会構造、神話、言語そして文学の紹介に役立たせようと翻訳を試みた。

『古事記』の起源 史書編纂の材料蒐集が始まったのは継体天皇と欽明天皇の御代の六世紀で、『古事記』の「今」とはその時代を言う。歴史書編纂の最初は六二〇年に聖徳太子と嶋大臣の下で為された。大化の革新に始まった天智、天武、持統、文武の歴代天皇の法的整備や改革に具体的な形態をあたえようと天武天皇の治世の頃、国の起源と固有の文化に対する関心が生まれていたにちがいない。

『古事記』編纂の宮廷の命令を得た安萬侶の役割は、漢字の表音と表意の機能を巧みに組み合わせる書記方法で、阿礼が「暗誦」していた「帝皇日継」Imperial Sun-Lineageと「先代旧辞」Ancient Dicta of Former Agesを一つの作品にまとめることであった。

〈系譜と寓話の史料の記録〉 記録の際の基本史料は系譜史料だが、それより複雑な構造の説話の記録は歴史的に証明されない内容もあるが、文学的な興味を呼ぶ部分である。『古事記』は韻文が多く、一一一の歌謡があり、例外なく音標式に筆記されていることに価値がある。注記に見える発音とアクセントへの関心は、テキストが朗唱され得るようにしようという編者の願いが感じられる。歌謡の言葉はいつもそれが関係する場面に相応しているとはかぎらないので、もしかすると独立した起源があるのかもしれない。また、古代の宮廷の儀礼的生活の中

での歌謡の呪術宗教的役割を忘れてはならない。

〈『古事記』と『日本書紀』〉 天武天皇の歴史書への関心が記紀の両書の成果をもたらした。両書はほぼ同時に完成しただけでなく、同じ主題の事柄を扱っていて、同時に考察することが古代日本の研究には不可欠だ。『日本書紀』は記録史料の幅広い選択の利用が試みられた。『古事記』の系譜の情報は非常に価値があるが、その情報はしばしば『日本書紀』に書かれた情報とは異っている。

〈古代の日本語〉 日本語で最も驚くべきは、あらゆる周辺の言語グループから孤立している事実だ。関係づけられる唯一の言語は沖繩で話されている方言だけである。

〈古代日本語の書記法〉 日本人は異文化の影響で書記法を発展させてきた。いわゆる神代文字は後世の音韻体系に即していて、江戸時代の粗雑な創作である。『古事記』が書かれた漢字は古代日本で知られていた唯一の文字で、それを基礎に平安時代に表音文字である仮名が発展した。

古代日本では漢字を大凡三つの方法で使っていた。この三つすべてが『古事記』に見い出せる。純粋な漢文として文字の意味とは絶縁して日本の音を表示させるために音標式に使用された万葉仮名と呼ばれる方法。記紀歌謡の表記はこの方法が貫かれている。さらに三つ目は日本語に合わせた漢文体で、我々がラテン語の省略形の「*is*」を英語で「*that is*」と読んでいるような方法だ。このような複雑な文体で書かれている『古事記』を読む現代の読者は、漢字が単なる音かあるいは何か意味を示しているのか等々を解説しなければならぬ。

〈写本と文献批判の歴史〉 『日本書紀』の写本が平安時代に遡るのに対して、『古事記』は比較的後世の写本が手に入るだけなのは、古代から中世を通じて、『古事記』が広く読まれてこなかった結果である。本翻訳は、平凡社から一九五八年に発行された全七巻の『古事記大成』の校訂版の本文に基づいている。

『古事記』の卓越した研究と解釈は著名な国学者本居宣長（1730-1801）のおかげで得られた。本居は一七五四年に『古事記』の初版を入手していたが、一七六三年に真淵との出会いを挙行し、『古事記』の学問的な研究に打ち込もうと決意した。以来、彼は、記念碑的な註釈である『古事記傳』を、一七六四年に着手し、三四年後の一七七八年に完成させた。この膨大な業績は、本居の死後一八二二年になってやっと刊行を終えている。本居によって、『古事記』は少なくとも『日本書紀』と同等の重要性を獲得した。

現代の『古事記』研究史で画期的な出来事は、一九一三年、歴史学者津田左右吉の研究の刊行である。津田は『古事記』のより古い部分は、歴史でも神話でもなく、皇室の支配の正統性を正当化するというただ一点の目的のために宮廷の知識人たちが後に作り上げたものと主張した。その研究は、物議を醸したが、後続の『古事記』の学問的研究は、彼が提案した方向に沿って修正されるようになった。一方で、和辻哲郎の『日本古代文化』（岩波書店1948-50）は、『古事記』には文学的刺激が明らかに働いていて、内的統一と一貫性がある。倉野憲司は『古事記の新研究』（至文堂1927）で、『古事記』は叙事詩文学の要素があり、ベーオウルフのような国家的叙事詩とみなして良いだろうと提言している。

この後に、同時代の様々な研究者と参考文献を数多くあげているが、省略する。以上はごく一部の抜粋である。フリーツパイは、言霊信仰に興味をもっていたのだろう。『祝詞』も翻訳し、その後はアイヌの口承に興味を注いだという。彼自身、「自分は古事記を研究したが、日本のその後の文学には興味は持てなかった」と述懐している。帰国後、ヒッピー生活を送りたいと遁世したという噂を聞いたこともある。オカルティックなところがあつたのだから。

(四) “The KOJIKI - An Account of Ancient Matters, Ō NO YASUMARO,” translated by Gustav HELDT, Columbia University Press, New York, 2014.

二一世紀に刊行された新しい全訳。訳者 Gustav Heldt の和文表記を、英語風にグスタフ・ヘルツトとするかドイツ語風にギユスターヴ・ヘルトとするか。本稿では、本書の書評を書いた福田武史氏¹⁵⁾に倣ってヘルトと表記する。なお、福田氏は、ヘルトの英訳には、典拠としたと訳者自身が述べている我が国の注釈書の解釈と一致しない翻訳箇所があることを指摘している。

翻訳書の姿勢について、私は前掲の旧稿「翻訳本『古事記』に見られる翻訳法と原語の理解」で、

翻訳に際して訳者が『古事記』をどのように理解していたか、という問題は、各翻訳が、わが国の誰による校注本を典拠にしているのがわかれば、自ずと解答が出る¹⁶⁾ことが予想される。

と述べて、翻訳本の底本を確認した。しかし、その結果、ある校注本を底本にしたと述べる訳者自身の言葉に頼っただけでは把握できない、と気付かされ、実際に翻訳された「結果から帰納的に考察されなければならない」と述べざるを得なかった。福田氏の指摘から、ヘルトの翻訳もまたそのような点がある¹⁷⁾ことが確認できた。

ともあれ、最新の英訳本の特徴を述べよう。まず原典を省略したところもなく、簡潔に訳されていて、読みやすいのだが、後述するように固有名詞が独特に解釈された意味で表示してあるので、日本人には特定できない厄介な点もある。米国会図書館の書誌に“(compiled by) Ō NO YASUMARO; translated by GUSTAV HELDT”と登録されている¹⁸⁾ようで、また、表紙や背文字には Ō NO YASUMARO が目立って表示され、『古事記』は誰の意図がどの程度反映しているのかという課題、つまり太安萬侶は「述べて作らず」だったのかどうかを考えたとき、安萬侶の役割が過剰に印象づけられるのではないかと危惧される。因みに、フィリップパイが compiler (編纂者) と表現した太安

萬侶を、ヘルトは以下で引用する序文からもわかるように author（作者）としている。

本書の序文は（一）と（三）の英訳本より遙かに簡潔だが、やはり節を立てて様々な問題を論じている。各節の要点を邦訳して紹介する。

『古事記』の物語は時にヘブライ文明の聖書やギリシャ神話やマヤの Popul Vuh がこの世に再現しているように語られている。悲劇的英雄やトリックスターや嫉妬深い女王が登場するだけでなく、自然と社会現象の起源の説明や日本語の最も古い詩に溢れた物語が織り込まれている。

ここ三世紀、愛国主義を正当化する人種的政治的イデオロギーを内包した聖なる文献とみなされてきたが、今や映画やマンガやアニメはじめ一般の情報媒体での主人公や物語にヒントを与える源泉を提供して、戦後の日本文化の世界への流布の担い手ともなっている。それを可能にしている力を伝えるために、本翻訳では神々や人物や土地の名前を、登場した文脈とその語源を考慮して、専門家ではない読者に神話の力を感じる機会を与えることが出来るように、平明さと一貫性を求めて冒険的な翻訳をしている。

古代の言葉と事柄とは一体として結びついていて、固有名詞の意味は、特定の行動や性格を反映していて、名称は本文の全体を構成する筋や系譜の中で重要な役割をしている。

〔構成と内容〕 叙事詩『古事記』は、神話と伝説と歴史とに相当する三部に分けられ、上巻の神代に続いて人代の中下巻へと移って、出来事が読者に身近な世界となっていく。中巻には征服者の戦士を主人公とした伝説的行動があり、下巻は皇位継承の紛糾を記述して読者の注意をこの問題に引きつけるかのようだ。

〔序文と作者〕 記の序文は、新しい王宮（平準な城塞の都）が確立した二年後に書かれている。ヤマト王朝は、奈良時代、唐王朝をモデルに大凡現代日本の領域に重なる地帯を整備した。大陸の国と異なり、七・八世紀には

一度ならず女性が統治した。序文が献上された四三代目元明（根源で輝いている）女帝の時代、北辺の地で銅の豊かな鉱脈が発見され、その時代を和銅（ヤマトの銅）と名付けた。

『古事記』を作者（author）太安萬侶は、統治の神話的宣言の書の制作を託すに相応しい人物だった。正史『続日本紀』（Continued Chronicles of Japan）は、安萬侶の経歴と死亡について短い記事を残している。安萬侶は自分の作品が天武天皇によって宣言された政策の遺産だと主張している。天武の皇位継承を確実にした壬申の乱は記の序文に詩的な対句が重ねられた常套句で生き生きと描かれている。安萬侶は、その時二〇歳代であっただろうから、戦闘を直接に体験したのだろう。天武は、即位後、歴史的記録の訂正にとりかかり、皇子と貴族二人に統治者の王朝系譜の決定版「帝王の年代記」つまり「天の統治者の太陽の系譜」と「往古の様々な出来事」の二種の文献を作るように命じた。

『古事記』の主要な記述は王室の命令により個人的にまとめられたと序文に記されているが、原文は人物像も性別も不詳の稗田阿礼に帰せられている。阿礼は、年毎の宮廷の儀式や宴会で歌ったり踊ったりした女性サルメだったのだろう。サルメの祖先アメノウヅメ（天の花輪飾りの女性）は、神話の中で主要な役目を果たしている（原文と文体）昔の日本語の書き言葉には句読点はなかった。読者は自分自身で気分的に文の纏まりを判断しなければならなかった。序文には、漢字を稗田阿礼の口承の音声を示すために使うと、意味の把握が困難になるので、漢字の表音と表意の機能が混在して使われ、複雑な表記となり、訓を特定させる注記が加えられた。また、当時知られていた仏典の文章や儀礼で使われた言葉などを利用し、豊かな表現を生み出した。

『古事記』後の歴史『古事記』の序文が書かれた八年後に、別のヤマト王朝史が宮廷で編纂された。その『日本書紀』（Chronicles of Japan）は、古代日本の公式の史料となった。八世紀に成立の詞華集『万葉集』（Manyō

Leaves Collection) に『古事記』の韻文があり、『古事記』に早くから知識人に読まれていたことがわかる。わずかだが、記の序文や歌謡に関する言及が平安や鎌倉時代の複数の学究的な史料から取り出すことが出来る。

現存する最も古い完全な写本は、室町時代の初期のもの。近世初期に印刷物の出現により、広い読者を得た新しい環境の中で影響のあった学派の一つである国学が生まれた。彼らは、朱子学者 (Neo-Confucian) の原理で寓話として日本の神話を読んでいた以前の学者と異なり、神話が書かれている古代の言葉を再現することによって独特で日本の独自性が復元できると主張した。

明治時代には、国粹主義は、西洋と同じ分野で同等の位置に立つことができるといって近代日本人の断言に相應しいという国民的文学の観念となるイデオロギー上の基盤を提供した。国粹主義の学者たちはまたチェンバレンが東京大学の最初の日本語の教授であったときに果した『古事記』の先駆的な翻訳を拡大して引用した。『古事記』は一九四五年まで公的な国民的信仰であった国家神道に不可欠なものだったが、三船敏郎主演で稲垣浩監督の「日本誕生」(1959) や一九六三年にスサノオの物語を土台にした芹川有吾監督の「わんぱく王子と大蛇退治」が公開された。マンガの『古事記』も石ノ森章太郎『古事記マンガ日本の古典』(1999) や奈良毅『マンガ古事記』(2009) はじめ多くの種類が刊行され続けている。

〈翻訳について〉 テキストの中に偏在しているカミという語は注意を向けるに値する。それは普遍的存在かつ個別的存在に渉る広い範囲の威力あるものを包括する超自然の実体である。泉やスカーフのよう個々の物質や山や風や太陽や海などの自然現象を支配するものでもある。本翻訳では「神 god」や「聖霊 deity」に代って「精霊 spirit」という語を選んだ。それは、第一に、多彩に配置された存在に随伴する多様な広い範囲の威力に言及でき、第二に古代のシャーマン宗教を思い起こさせる、三番目は spirit は漢字の神よりも古い観念を暗示し、霊

妙という含意が可視の世界から消えたりする超自然の存在に相応しい、ということが理由である。

地名は、専門家ではない読者に文化的歴史の意味が伝えられることを意識して訳語を定めた。おそらく最も有名な場所は、アマテラスが祀られているイセという土地だろう。それを私は、禊ぎという浄化の儀礼を通じて必要とされる聖化された清らかさのある多くの川を連想させるために「聖化された水の流れ」と翻訳して、その地を示している。もう一つの重要な例はイズモ（巻き上がる雲）で、その名はその地の支配権を主張しているスサノオが詠んだ歌にある「八重の雲がわき上がっている」（ヤクモタツ）という表現が反映している。その結果、日本の歴史そして地名に馴染んでいる読者には空想的だという印象を与えるだろう。このように、私の選択した訳語が原典の音から離れている例もある。

伊勢の神宮をチェンバレンは the temple of the Great August Deity of Ise、フィリップは the shrine of the Great Deity of Ise と英訳している。共に「伊勢」は音写しているのだが、ヘルトは、景行天皇の条で倭建命が伊勢に姨倭比賣命を訪ねる段の「故受命罷行之時參入伊勢大御神宮拜神朝廷」《故れ命を受けたまはりて罷り行でます時に、伊勢の大御神の宮に参入りまして神の朝廷を拝みたまひて》を

Having thus received this mighty-worded command, he left to pay reverence at the mighty gates of mighty halls of the great and mighty spirit in Sacred Streams.

と英訳し、伊勢の地名を Sacred Streams（聖なる流れ）と訳して示している。

なぜ固有名詞の伊勢が Sacred Streams と訳されて表示されるのか。巻末の地名用語解説に Sacred Streams とこの項を立てて、Ise と原音を記し、次の通り解説している。なお、本州と三重は原音が示されているだけである。

本州の中部（Central Honshu）の太平洋岸の古代からの聖地で、現在は三重県 Mie にある。その名前はその神

社の著名なネットワークの中を往来する多くの流れに関係している。語源は絶壁の海岸 (Isō 磯) に関連しているという説もある。歌では、カミカゼノ (聖霊の風) が枕詞となっている。

ヘルトは、例えば、「故所避追而降出雲國之肥河上在鳥髮地 此時箸從其河流下《故れ避追はえて出雲國の肥河上在る鳥髮の地の所に降りましき。此の時しも箸其の河より流れ下りき》」という文章を

So having been exiled, Ruling Man went down to the land of Billowing Clouds, to a place called Bird Head on the upper reaches of Spirit River.

と英訳している。出雲国は「Billowing Clouds 雲の渦巻く地」、鳥髮地は「Bird Head 鳥の頭部の場所」、肥河は「Spirit River 精霊の河」と訳して、本文で示し、巻末の地名用語解説欄で次のように説明しているのである。

出雲は、「BLOWING CLOUD (Izu-mo)」の見出しで、「現在は朝鮮に向っている鳥根県東部を占める本州の南西部の河岸地帯で、古代には鉄が豊富だった土地。その大国主 (Great Land Master) のための神社は日本の最も古い二つの神社の一つである。歌ではヤクモタツ (八重に重なる雲がわいている) という聖なる形容句が先行する」。鳥髮は、「“BIRD HEAD (Torikami)”の見出しで、「Billowing Cloud (出雲国) と Mother Oaks (伯耆国) の国境の Spirit River (肥河) の上流の山の名前」。肥河は、「SPIRIT RIVER (Hi-no-kawa)」の見出しで、「今は Hi-kawa として知られている Billowing Clouds とその」の神話における主要な河川で、地名辞典 (風土記) には鮎と鱒が豊富だと記されている。ヒノは河から肥沃な原野に水をもたらしていた木の水路に関係があるという説もある」。

そして、「できるだけ翻訳の流れを切らない」という翻訳方針であったと述べている。それが固有名詞の原音を出る限り避けて、自分が解釈したその名の意味を英語で示した理由なのだろう。固有名詞の日本語の原音は英語の読者には馴染みがないことから、原音表記をできるだけ避けて、物語を理解してもらうことを優先させて翻訳している

のだ。ただ、神や人の名称そして地名とに分けた用語解説集を巻末に置いて、そこに原音を知ってもらえる処置は施されている。

さらに、右に続くヘルトの序文を続けよう。

個々の漢字の読み方を示している多数の割注は、専門家以外には、殆ど無意味なので、割愛した。ただ、有益な補足的情報（例えば、文中の語の由来や構文上の役割など）と思われる注記は括弧の中に書いて残した。フィリップの翻訳で採用された今は音価が不確かな三つの母音を区別して表示したり、hやfの代わりにpを用いるなどの古代の日本語を表示する方法は採用しない。

翻訳は主に山口佳紀・神野志隆光編『古事記 新編日本文学全集』（東京・小学館1997）に基づいている。とくに難解な章句は、上代語辞典編集委員会編『時代別国語辞典・上代編』、尾畑喜一郎編『古事記辞典』、荻原浅雄校注訳『古事記上代歌謡・日本古典文学全集』、西郷信綱『古事記註釈』を参照した。神々の名前については、西宮一民の『古事記・新潮日本文学集成』、地名は、角川文化振興財団編『古代地名辞典』と吉田茂樹『日本古代地名辞典』。上記の日本語の史料に加えて、本書は、チェンバレン Basil Hall Chamberlain、フィリップ Donald Philippi、ダンノ Danno Yoko によってなされた以前の英訳の研究からと同じように古代の日本に関する一世紀以上の英語による研究の集大成された言葉の宝庫から多くを学んだ。

序文は参考文献をあげた右の言葉で閉じている。ここに言及されている Danno Yoko という詩人の書は、題名が "Songs and Stories of the Kojiki" (Ahadada Books: 2008) で、書誌情報からして翻訳本とは言えないようなので、本稿で取り上げる英訳本の範疇に入れなかった。また『古事記物語』の類と言えるかもしれないのだが、本稿の巻頭の表に記載しなかった。

また、Keith Yatsubashi 著のものずばり“KOJIKI”と題する本が二〇一六年に米国で刊行されている。しかし、本稿で吟味している『古事記』とは関連のないファンタジー小説であった。

以上の四種が『古事記』全巻の英訳としてあげられるが、一応全巻の英訳と言える書がもう一種ある。

“KOJIKI - An Abridged Translation,” in “The late Dr. Inazo Nitobe’s unfinished translation of Lao-tzu and the Kojiki,” edited by Yasaka Takagi, Institute for Comparative Studies of Culture, affiliated to Tokyo Woman’s Christian University, 1925-26? (『新渡戸稲造全集』第一五巻 教文館 昭和四五年・一九七〇所収)

新渡戸稲造 (1862-1933) の未公刊で、『古事記』巻末の推古天皇まで英訳されている。だが、神々や人々が活躍する物語を示す箇所は翻訳されているが、神と人の系譜や活躍の少ない神々の名や殆どの歌謡が訳されていないので、上記の四種に加えて、全巻英訳が五種あるとしなかった。『古事記』冒頭の一節を例にとつて、具体的にその様子を示そう。次の原文表記の傍線部分が、英訳されずに割愛された箇所である。翻訳全体がこの姿勢でなされている。

天地初發之時於高天原成神名、天之御中主神次高御產巢日神次神產巢日神、此三柱神者並獨神成坐而隱身也次國
椎如浮脂而久羅下那州多陞用弊疏之時、如葦牙因萌騰之物成、神名宇麻志阿斯訶備比古遲神次天之常立神、此二
柱神亦並獨神成坐而隱身也／上件五柱神者別天神。次成神名國之常立神次豐雲上野神。此二柱神亦獨神成坐而隱
身也。次成神名宇比地邇神次妹須比智邇神次角杵神次妹活杵神次意富斗能地神次妹大斗乃辨神次次母陀琉神次妹
阿夜訶志古泥神次伊邪那岐神次妹伊邪那美神。上件自國之常立神以下伊邪那美神以前并稱神世七代、上三柱獨神各云一
代也 代次雙十神各云一
神云一

In the beginning of heaven and earth, the following Kamis are born in the Palim of High Heaven,

(Takamanohara): Lord of Celestial Center (Amé-no-minaka-nusi), High Conjoiner (Takami-musubi), Divine Conjoiner (Kami-musubi). Then the country still young and like unto floating oil or a jelly-fish, there are born two more Kamis from a substance that shot forth after the manner of a reed. Their names are Sweet Reed Sprout (Umasi-Asi-Kabi-Hikoji) and Heaven's Eternally Standing (Amé-no-toko-tati). All these Kamis are born alone and hide their selves. / The above five Kamis are called special gods of heaven. Then follow seven generations of the divine age, beginning with Earth's Eternally Standing and ending with the Attractor (Izanagi) and the Attractress (Izanami).⁽²¹⁾

全巻の翻訳ではあっても、このように簡約化されているので、本稿で言う全訳の範疇に含めなかった。

以上の全巻の英訳の他に部分訳とくに上巻の神話の英訳は戦前から何種類も作られているが、稿を改めて論じたい。

三 B・H・チェンバレンの英訳『古事記』

(一) その特徴

英訳『古事記』の中で最も著名で影響力のあるチェンバレンの英訳本の特徴は、次の九点にまとめることができる。

一、圧倒的な認知度

殆どの『古事記』翻訳者が言及し、参照していると判断され、日本でその英語が様々な書で利用されてきた。

二、余すところない逐語訳

佐伯彰一氏が「何よりも細部をごまかさずに、忠実な訳出ぶり」¹⁹と評し、小花清泉氏の「大いに原文を重んじ、つとめて、逐字譯ならしめんとしてゐる」²⁰との評は他の英訳に比べても共感できるところである。

三、詳細な注釈があり、広範囲の種々の問題提起、研究課題を示している

小花清泉氏は、右に引用した文章の前段で、

註釋は本文の二倍三倍もあり、長編の序論が巻頭に載せられてある。．．．一節ごとに小註の割合に多いのは、外国人が此の特徴ある英譯を讀むに際して、本文の眞實を理解し易からしめんとした故であるが、我々日本人が見ても、新しい解釋を示されたとおもふ事が往々ある。

と指摘しているが、筆者にも異論はない。そのごく一部の例として、二つの例を取り上げよう。

①わに（和邇）

長い歴史もあり成果の蓄積もある日本の『古事記』研究史のなかで、『古事記』にどんな動植物が登場するか、動物相や植物相を論じた業績は未だ多くないようだが、チエンバレンは明治一五年の時点で既に取り上げ、序文で、『古事記』に登場する動物や植物の一覧を示している。そして、因幡白兔の物語や豊玉毘賣の物語で、日本にいないはずの南方の動物ワニがなぜ出て来るのか、翻訳書の注記欄でそんな問題も提示している。

チエンバレンはサトウが「和邇ワニ」の訳語に「shark 鮫」を当てていることを取り上げ、次のように論じた。

問題とする被造物に関して昔の歴史的文献の中の記述が何かはつきりとさせたかっただろう。その魚類は『日

本書紀』にも出てくる。しかし、そこで言われているのはむしろ魚類ではなく、大蛇に似た何らかの存在だと考えられる水陸両性の生物である。日本の注釈者たちが引用している説明は確かに鰐に関連している。そこで翻訳者はワニに対して普通に認められている訳語 *crocodile* を拒否する十分な理由はないと思う。ワニは明らかにおとぎ話以外の話の中には出てこないし、他の国そして日本自身の場合でも、神話の創造者がワニの話を異郷での生活の冒険であることを想像させるために造り出すことは否定できない。⁽²¹⁾

この問題に関して新渡戸稲造も、ワニを「*crocodile* 鰐」と英訳していて、それについて注で弁明している。

元々の名は *wani* で、この語は *crocodile* と訳されるのが普通である。だが、アーネスト・サトウ卿は、日本の水域には *crocodile* はいないのだから、*shark* 鯊のほうが翻訳として一層適切だと考えている。しかしながら、チェンバレンは、自然科学が立証しえない叙述が効果的となる「明らかに説話的な話」の中にだけ登場している *wani* のだから *crocodile* の訳語でよいと考えている。⁽²²⁾

このように、サトウが「*shark* 鯊」と訳しても自分がチェンバレンと同様に「*crocodile* 鰐」で通している理由を述べているのである。ここで注目したいのは、チェンバレンは『古事記』のワニは神話の中なのだから、現実の動物相に縛られなくともよいとの立場から判断して「*crocodile* 鰐」を当てている、と解釈した点である。この姿勢は、このワニの問題に言及して、鰐という動物の知識が「神話的な形で」日本に達していて、古代の日本人に間接的に知られていたと推定しているレヴィ・ストロスに近い立場であることが思い出されてくる。⁽²³⁾

鰐をワニと呼ぶ地方があるし、鰐類の古称だと説明する国語辞典もあるのに、なぜかそれを採らずに、チェンバレンは、本文にワニの語があると、「英語の *crocodile* に当たる意味だ」と注記を繰り返して、わざわざ語義の原義の確認をしている。それは戸惑いを覚えるほどだ。実際の鰐ではなく、神話や説話の中の用法だと確認したかったのだろう

か。⁽²⁴⁾

なお、新渡戸は、豊玉毘賣命が姿を変えた「八尋和邇」を「a huge crocodile (巨大な鰐)」と訳している。因みに、『古事記』の原文、真福寺本のテキストには漢字の鰐も鮫も使われていない。すべて、和邇か和爾か丸邇といわゆる音仮名表記である。ただ、『日本書紀』ははっきりと鰐という漢字を使って、時に鰐魚と表記したりしている。

② 古代日本人の色彩表現

佐竹昭広氏の『古語雑談』に次の一節がある。

『古事記』(七一二年成^{マヤ})の世界には黄色が欠落しているという事実を最初に注目した学者は、多分、英人チェンバレンであろう。・・・チェンバレンから約二十年後、明治三十七年に新村出の「色彩空談」が発表された。小篇ながら日本の言語学者による先駆的な色名研究である。かれの見解もまたチェンバレンに同じい。

『古事記』などには、色の名といえは、青・赤・白・黒の四色ぐらゐなもので、黄の如きは殆ど無いというてもよく、云々

・・・『万葉集』も、色彩に関する形容詞としては右の四語しか持っていない。『万葉集』に「みどり」「くれなゐ」「むらさき」といった数々の色彩語が多用されていることは周知の通りであるが、このたぐいの色名は、「むらさき」が紫草、「くれなゐ」がいわゆる紅花^{ベニバナ}、「みどり」が草木の新芽を意味する語だったというように、もとをたせば具体的な物の名を色彩名に転用した比喩的な用法に由来するもので、・・・抽象された色の概念をあらわす四つの形容詞とは性格を異にする。⁽²⁵⁾

確かにチェンバレンは、英訳『古事記』の序文で、次のように述べている。

古事記に出ている色に関する語は「黒、青（緑も含む）、赤、白黒斑（馬の色）、白」である。黄は、シナ語の表現代 Hades（冥界）を意味する「黄泉」という色を考慮しない語の場合を除いて使われていない。また、現代日本語にある色相の区別をしている多量の語も存在していない。⁽²⁶⁾

四、「」で記された挿入が頻出し、語を補足して文の意味を明確にしている。

例えば、中巻の崇神天皇条「故大毘古命更還參上請於天皇時天皇答詔之。此者爲在山代國我之庶兄建波邇安王。起邪心之表耳伯父興軍宜行」をチェンバレンは次のように、「」を多用して英訳している。

So his Augustness Oho-biko returned up again [to the capital] and made a report [of the matter] to the Heavenly Sovereign, who replied and charged him [saying]: "Methinks this is a sign that my half-brother, King Take-hani-yasu, who dwells in the land of Yamashiro, is planning some foul plot. [Do thou,] uncle, raise an army, and go [after him]."

この短い中に四個所もあって、補語、動詞、接続表現などを補って文意を明確にしていることがわかる。チェンバレンの英訳全般にこの方法が貫かれている。因みに、ここの宣長の訓にチェンバレンの挿入した表現を「」で入れてみよう。

かれ大毘古命、更に「都へ」返へりまゐるのほりて、すめらみことに「出来事を」まをすときに、天皇宣のりたまはく「そして言う、」こは思ふに山代國なるなが庶兄建波邇安王の邪心を起せるしにこそあらめ、「汝よ」伯父軍を興して「彼に従って」ゆかせ

なお、この特徴については、後述する七の③（七二頁）の事例でも確認できる。

五、翻訳不能との表示が一個所ある。

英訳されておらず「？」と記され、翻訳不能と注記された個所がある。神武天皇の次の個所で大久米命が詠んだ歌の upper 句を、英訳せずに、四つのを置いている。

爾大久米命以天皇之命詔其伊須氣余理比賣之時見其大久米命黥利目而思奇歌曰《爾に大久米命天皇の命を其の伊須氣余理比賣に詔れる時に、其の大久米命の黥利目を見て奇しと思ひて歌ひければ》

阿米都都 知杼理麻斯登登 那杼佐祁流斗米 《あめつつ ちどりましとと などさけるとめ》

Then His Augustness Ohokune informed Isuke-yori-hime of the Heavenly Sovereign's decree, whereupon she, seeing the slit sharp eyes of His Augustness Ohokune, sang in her astonishment, saying:

? ? ? ? "Wherefore the slit sharp eye?"

つまり、歌謡の末句「那杼佐祁流斗米」を Wherefore the slit sharp eye? と訳しただけで、上句「阿米都都知杼理麻斯登登」は?の記号により翻訳できない、と示しているのである。そして?とした理由を注で

この短い歌の最初の部分は、註釈者たちですら、その句を構成している音節はどのように分節して単語とすべきか合意していない。考えられる語義を得る努力へと本居宣長をはじめとする人々を駆り立てたこの難題について、『古事記伝』に論じられている。その見解は『稜威言別』とは全く異なっている。ここで憶測だけで引用するのは意味がない。the slit sharp eyes (鋭い切り目)については、既述の注を見て欲しい。

と述べて弁明している。

フィリップパイはこの歌謡を Ame-tutu / Tidori musu toio / Why the tattooed eyes? の三行に訳した。上句は音写しているだけで、意味は示していない。彼も意味の理解が得られなかったのだろうか。ただ「句を構成している音節

はどのように分節して単語とすべきか合意がない」として解釈を放棄したチェンバレンと異なり、音の分節は示している。

ヘルトは *They are like the swift, / the plover, and the stripped finch - / why such sharp-split eyes?* 三行で訳して、全句に英訳語を与えている。その訳文を反訳すると（反訳とはA語をB語に翻訳したそのB語に基づいてA語に戻す作業を言うが、本稿では、A語の原文に戻すのではなく、疑似Aを作ってB語の翻訳の姿勢と方法とを知らうという作業を言う）「大久米命の目は）アマツバメそして千鳥やアトリ科の小鳥のようだ。どうしてそんな目が鋭く裂けているのか？」となり、『古事記傳』の解釈か、あるいはそれに拠った『日本古典文学全集一 古事記 上代歌謡』（小学館、昭和四八年）の注記を参照したようである。なお、以上三者ともに、結句は英語にしているが、いずれも西宮一民が現代語で示した「入墨した²⁰⁾」の意味は表現されていない。

ただ一箇所だけとは言え、チェンバレンが翻訳不能としたのは、*A translator is a traitor.*（翻訳者は反逆者）なる成句の示す翻訳の限界を認めて仮訳で済ませておけなかった研究者としての良心の発露だと理解すべきなのだろうか。後述するように、牧健二は、サンソム卿が「チェンバレンは不注意、不正確なものに対し憎悪の心がつよく、慎重な研究者であった²⁰⁾」と評していたことを紹介している。

六、橘守部の影響が強いのか。

チェンバレンは、来日直後から日本語学習を始め、早くから古今和歌集などを学んだ。佐々木信綱の「バジル・ホール・チェンバレン先生小傳」には「舊濱松藩士荒木氏に就きて古今集を聴講。鈴木康正氏に従ひて、萬葉集・枕草子等より謡曲・狂言の類をも歩狝し、自らも和歌を詠じて、橘東世子刀自の歌會に列し、橘家にては、守部の遺著

にして未だ刊行せられざりし稜威道別・稜威言別を借覧⁽²¹⁾とある。英訳古事記完成以前のことである。守部の著作からかなりの影響を得ていたようだ。本文の英訳の語や表現についての龐大な注記の内、ざっと数えただけでも一〇〇個所の注記で都合一二八回、その他一二の歌謡さらに序文や文献一覽での言及を含めると一五〇回以上 Moribe の名に言及している。中には、自説の典拠とした『稜威言別』等の書名をあげて、それが未刊であると断っている箇所も見える。宣長の説に触れ、その批判として言及している箇所が多い。こうしたチェンバレンが守部から何を学んだのか、追って機会があれば、まとめてみたいと思っている。

七、固有名詞や日本特有のものごとをどの程度厳密に示すか。原語を残すよりも意味の提示を重視するか。

チェンバレンは神社を *shrine* ではなく *temple* と訳している。*shrine* の原義は廟だから、*temple* の方が適切だと聞くこともある。今は、誤解を避けるために *inja* と言う例が多い。「かみ」をどう翻訳するかに通じる問題である。新渡戸稲造は「かみ」の翻訳に際して次のような見識を示している。

Kami は通常は *deity* や *god* と訳される。それは「上、目上」の意味の語と同義語で、神と上とを同一視する人もいる。アイヌ語の *Kamui* (神 *god*) と関係があるのかも知れない。*Kakure* と *mi* つまり隠された身体から派生した可能性があるだろうか。最も高貴で古い幾柱かの *Kamis* 神々は「自ら身を隠した」と言われてきている⁽²²⁾。

ある文化に独特の概念を示す表現を原語のままか翻訳して示すかどうかをめぐる、ラフカディオ・ハーン(小泉八雲)が「杵築」「八重垣神社」「家庭の祭屋^{まつりや}」と題したエッセイで『古事記』の引用と示してチェンバレンの英訳を引用した時の、引用の方法を吟味すると、チェンバレンの姿勢は鮮明となる。ハーンはチェンバレンの英訳で『古事記』を読んでいて、それを引用した際に、そのまま転記せず、原語の日本語を生かす姿勢で僅かな改変を加えてい

た。そこからハーンと対照的なチェンバレンの姿勢さらには両者の日本文化観の相違が浮びあがってくるのである。

その、筆者はその一例として“Glimpse of Unfamiliar Japan” (1894『知られぬ日本の面影』) 収載の「Yaegaki-jinja [八重垣神社]」の『古事記』の引用箇所を検討してみた。まず引用箇所の原文を掲げる。

故所避追而降出雲國之肥河上名鳥髮地 此時筭從其河流下 於是須佐之男命以爲人有其河上而尋覓上往者老夫与
老二人在而童女置中而泣 余問賜之汝等者誰 故其老夫答言僕者國神大山津見神之子焉僕名謂足名稚妻名謂手
名稚女名謂櫛名田比賣 亦問汝哭由者何 答白言我之女者自本在八稚女是高志之八俣遠呂智每年來喫 今其可來
時 故泣余問其形如何 答白彼目如赤加賀智而身一有八頭八尾亦其身生蘿及檜櫺其長度豁八谷峽八尾而見其腹者
悉常血爛也 余速須佐之男命詔老夫 是汝之女者奉於吾哉 答白恐亦不覺御名 余答詔吾者天照大御神之伊呂勢
者也 故今自天降坐也 余足名稚手名稚神自然坐者恐立奉 余速須佐之男命乃於湯津爪櫛取成其童女而刺御美豆
良告其足名稚手名稚神汝等釀八鹽折之酒 亦作迴垣於其垣作八門每門結八佐受岐每其佐受岐置酒船而每舩成其八
鹽折酒而待 故隨告而如此設備待之時其八俣遠呂智信如言來乃每舩垂入己頭飲其酒於是飲醉留伏寢 余速須佐之
男命拔其所御佩之十拳劔切散其蛇者肥河變血而流 故切其中尾時御刀之刃毀 余思恠以御刀之前刺割而見者在都
牟刈之大刀 故取此大刀思異物而白上於天照大御神也 是者草那藝之大刀也 故是以其速須佐之男命宮可造作之
地求出雲國 余到坐須賀地而詔之 吾來此地我御心須須賀賀斯而其地作宮坐 故其地者於今云須賀也 茲大神初
作須賀宮之時自其地雲立騰 余作御歌其歌曰

夜久毛多都 伊豆毛夜幣賀岐 都麻菴微爾 夜幣賀岐都久流 曾能夜幣賀岐哀。(中村啓信訳註『新版古事記』)

(角川文庫) 掲載の本文を元に、一部、字体を変えたり字間を設けたりした。

つぎに、チェンバレンの英訳とハーンの引用文を校合した英文を掲げる。ハーンが削除した箇所に取り消し線を、

ハーンが補足した語に下線部線を付した。これによって両者の相違は一目瞭然であろう。なお文中に添えた丸番号は、後述するチェンバレンの翻訳の特徴が見られる箇所である。特に①と⑤は、遠田勝氏の「チェンバレンはハーンが作中に日本語を用いることに度々苦言を呈した」という指摘を彷彿とさせる具体例を見ることが出来る。さらに本章の四(六四頁)で既述した「語を補足した」という特徴も以下の③から確認出来る。

So, having been expelled, [His-Swift-Impetuous-Mate-Augustness] Then ① Take-haya-susa-no-wo-no-mikoto ② descended to a place called ③ Tori-kami at the headwaters of the River Hi in the land of Idzumo. At this time some chopsticks a chopstick ④ came floating down the stream. So His-Swift-Impetuous-Mate-Augustness, Take-haya-susa-no-wo-no-mikoto ①, thinking that there must be people at the headwaters of the river, went up it in quest of them, when And ⑤ he came upon an old man and an old woman, two of them—who had a young girl between them, and were weeping. Then he deigned to ask, “Who are ye?” So the old man replied, saying: “I am an Earthly Deity, child son ⑥ of the Deity Great-Mountain-Possessor. Oh-yama-tsu-mi-no-Kami ⑦ I am called by the name of Foot-Stroking-Elder. Ashi-nadzu-chi ⑧ my wife is called by the name of Hamd-Stroking Elder. Te-nadzu-chi ⑨ and my daughter is called by the name of Wonderous-nada-Princess. Kushi-inada-hime.” ⑩ Again he asked, “What is the cause of your crying?” The old man ⑤ answered, saying: “I had originally eight young girls-as daughters. ④ But the eight-forked serpent of Koshi has come every year, and devoured one and it is now its time to come, wherefore we weep.” Then he asked him, “What is its form like?” The old man ⑤ answered, saying: “Its eyes are like akaka-gachi; it has one body with eight heads and eight tails. Moreover, on upon ④ its body grow moss and also chamaecypris-and-cryptomerias-sugi and hinoki trees. ②

Its length extends over eight valleys and eight hills; and if one look at its belly, it is all constantly bloody and inflamed.” (What is called here *akatagachi* is the modern *hohodzuki*.) Then His-Swift-Impetuous-Male-Augustness *Take-haya-susa-no-wo-no-mikoto*② said to the old man, “If this be thy daughter, wilt thou offer her to me?” He replied, saying, “With reverence, but I know not thine august name.” Then he replied, saying, “I am elder brother to the Heaven-Shining-Great-August-Deity *Ama-terasu-oho-mi-Kami*③ So now④ I have now⑤ descended from heaven.” Then the Deities Foot-Stroker-Elder *Ashi-nadzu-chi*⑥ and Hand-Stroking-Elder *Te-nadzu-chi*⑦ said, “If that be so, with reverence will we offer fiber to thee.”⑧ So His-Swift-Impetuous-Male-Augustness, *Take-haya-susa-no-wo-no-mikoto*,② at once taking and changing the young girl into a multitudinous and close-toothed comb, which he stuck into his august hair-bunch, said to the Deities Foot-Stroking-Elder and Hand-Stroking-Elder, *Ashi-nadzu-chi* and *Te-nadzu-chi*:⑥ “Do you distill some eightfold refined liquor. Also make a fence round about; in that fence make eight gates; at each gate tie [together]⑨ a platform; eight platforms⑩ on each platform put a liquor-vat; and into each vat pour the eightfold refined liquor, and wait.” So as they waited after having thus⑪ prepared everything in accordance with his bidding, the eight-forked serpent came truly as [the old man] had said, and immediately dipped and put a head⑫ into each vat and drank the liquor. Thereupon it was intoxicated with drinking,⑬ and all [the heads]⑭ lay down and slept. Then His-Swift-Impetuous-Male-Augustness *Take-haya-susa-no-wo-no-mikoto*② drew the ten-grasp sabre that was augustly girded on upon⑮ him, and cut the serpent in pieces, so that the River Hi flowed on changed into a river of blood. So when he cut the middle tail, the edge of his august sword broke. Then

thinking it strange; he thrust into and split [the flesh] with the point of his august sword and looked and there was a great sword [within]. So he took this great sword and, thinking it a strange thing, he respectfully informed the Heaven-Shining-Great-August-Deity.^② This is the Herb-Quelling-Great-Sword. So thereupon His-Swift-Impetuous-Male-Augustness Then Take-haya-susa-no-wo-no-mikoto^③ sought in the Land of Idzumo for a place where he might build a palace. Then he arrived at a place [called] Stuga and said: “Oh coming to this place my august heart is pure;” and in that place he built a palace to dwell in. So that place is new-called Stuga.^④ When this great Deity first built the palace of Stuga; clouds rose up thence. Then he made an august song. That song said:^⑤

“Eight clouds arise. The eight-fold fence of Idzumo makes an eight-fold fence for the spouses to retire [within]. Oh that eight-fold fence.”

Ya-kumo tatsu / Izumo ya-he-gaki; / Tsuma-gomi ni / Ya-he-gaki tsukuru; / Sono ya-he-gaki wo⁽²⁾^⑥
これを踏まえて、チェンバレンの翻訳の原語の扱いの特徴を五点指摘しておきたい。

① 神名をチェンバレンは解釈した意味で示したが、ハーンは原音を優先している。

例えば、須佐之男命の場合、チェンバレンは「His-Swift-Impetuous-Male-Augustness (素早くて激烈な高貴な男性)」と自身が解釈した名前の意味の英訳表現を用いているが、ハーンは一般に訓まれてきている音をそのまま転写して「Take-haya-susa-no-wo-no-mikoto」と表記した。意味を取って訳すか音を取って原音を残すか、この両者の神名の扱いの方針はそれぞれ一貫していて、すべての引用個所でこの両者の相違が一定して見られる。後述する⑤も参照され

りたい。

② 日本独特の存在、動植物などは、近似の意味の英訳で示す一方で厳密な伝達を期している。

日本では一般的であろうが異文化圏では馴染みが薄いと思われる事柄、とくに動植物は、チェンバレンはラテン語の学名などを使っている。一方ハーンは『古事記』に言及するときにはチェンバレンの英訳に基づいているが、それでも、引用したときにはチェンバレンがラテン語にした所を日本語の音に直している場合がある。

八岐大蛇の描写で、「その身に蘿こけまた松ひすぎ楹ひすぎ生ひすぎひ」をチェンバレンは

Moreover on its body grows moss, and also chamaecyparis and cryptomerias.

と訳したが、ハーンは、

Moreover upon its body grows moss, and also sugi and hinoki trees.

とスギとヒノキの音のままに直して引用した。この事例は、④でチェンバレンの英語をハーンがどのように引用したのかを示したので、そこで確認できる。いずれにせよ、共に Japanese cedar と和英辞典にあるような英訳ではないことが注目される。

③ ともに文意の明確化を重視し原文にない語を補充している。

文意の明確化のためにチェンバレンは頻繁に翻訳文の中に「」を使って、そこに原文にない接続語、主語、補語などを補足している。しかし、ハーンはその殆どすべて括弧を取って、括弧内の語をそのまま文章の中に入れ込んでおり、読みやすくなっている。

④ 文の接続や語の単複の扱いなど一部の語彙や文体の細かな変更を加えている。

「此時箸從其河流下《此の時しも箸其の河より流れ下りき》」を「At this time some chopsticks came floating down the stream.とチェンバレンは英訳してゐる。一膳の箸は複数形で示すと学習してきた私共にはこれが普通であるが、ハーンは At this time a chopstick came floating down the stream.と箸を単数形で示した。さらに、child は son に、young girls は young daughters に、また on を upon に代えている。その他の引用文でも同様の変更が見られる。

⑤ 神名の場合と同様、歌謡もチェンバレンは英語、ハーンは原音の音の調べを重視している。

左記の引用の最後の歌謡は『古事記』で最初に出ている歌である。『古今和歌集』の「仮名序」で、

人の世となりてすさのをの命よりぞ三十文字あまり一文字はよみける。すさのをの命は天照大神のこのかみなり
女と住みたまはむとて出雲の国に宮造りしたまふ時にそのとこに八色の雲の立つを見てよみたまへるなり
や
雲立つ出雲八重垣妻ごめに八重垣作るその八重垣を。かくてぞ花をめて鳥をうらやみ霞をあはれび露をかなしぶ
心言葉多く様々になりける。遠き所もいでたつ足もとより始まりて年月をわたり 高き山も麓の塵ひぢよりなりて天雲たなびくまで生ひのほれるごとくに この歌もかくのごとくなるべし

と言及され、その後、我が国の和歌の始原とされてきた歌である。この歌を、チェンバレンは意味を示すべく英語に訳して示したが、ハーンは三一音をそのままローマ字で音写し、チェンバレンの英訳を章末の注で示して読者の意味理解に資している。

八、誤読か否か。

我が国での通例の訓み方とは異なる音写や原文の数字とは異なる訳語があったりする。斯様な不一致に出会った場合、誤植であれば訂正すればよいだけのことであり、指摘するのは揚げ足取り、些末主義の難を免れないだろう。だが、チェンバレンの英訳本の誤植の可能性について触れざるを得なくなつたのは、誓約の段に見える「天菩比命之子建比良鳥命」の割注にある「无邪志国造」を、初版で Rulers of the Land of Muzashi と示していながら、注記には「昔も今も Muzashi は濁音とならない」としていて、新装版では Muzashi と校正してあったので、明らかに本文の Muzashi は誤植だと理解できたからである。因に、宣長は「むやしのかにのみやつこ」と濁音で訓んで、『古事記傳』七之巻、神代五之巻で、次のように解説している。これは、チェンバレンの注記と正反対である。

武藏なり、今は邪を清みて唱れども、濁るべし。

以下には、明治一六年の刊行以来、今日再販されている Tuttle 版に至るまで変っていない表記で、気になる箇所を取り上げる。訂正されていない誤植かあるいは誤解かと疑問を生む例は以下のように複数ある。

但し、これらは誤植ではなく、また誤解された音写でもなく、原典の理解に関わる課題である。一見、誤読と思える翻訳の理由つまりチェンバレンの意図については考察が至らないので、問題点の指摘だけをしておく。

① 序文の「臣太安萬侶」

the Court Noble of Futo no Yasumaro (宮廷貴人ふとのやすまろ) と訳され、Futo no の表示は、安萬侶の出自を解説した二個所の注記に計三箇所見え、版を重ねてもこの音写は変っていない。誤植ではなさそうだ。他の外国語訳は、O no や OPO NO など、Futo no Yasumaro とどう例は見えない。

チエンバレンは太安萬侶の姓をフトと言っていて、日本の周辺の人々も納得していたのではないだろうか。

最近、『旧事本紀』の書名を *Kyūjiki* として *Kujiki* を異名と表示した例をみたこともある。略称はそうなのだろうか。ローマ字表記は原語の音を示すことになる。「日本をニホンかニッポンか」どう読むべきかという疑問に対して、十六世紀に日本へ来た宣教師の残した文献に *Nihon* とも *Nippon* とも書かれていることを根拠に、両様の呼び方があったとして、どちらでもよいという意見があるが、ローマ字表記はそうした音を確定する効用がある。そこに翻訳本の利点があるわけだが、誤植だとは考えられないチエンバレンの *Futo no Yasumaro* の表記に、日本人の固有名詞は音でも訓でも読み方は自在なのかもしれないなどと考えさせられた。

② 黄泉国訪問譚の伊邪那美命の体に八つの雷があった記事

入見之時宇士多加禮斗呂呂岐弓於頭者大雷居於胸者火雷居於腹者黑雷居於陰者析雷居於左手者若雷居於右手者土雷居於左足者鳴雷居於右足者伏雷居併八雷神成居《入り見ます時に宇士たかれとろろぎて、頭には大雷居り、胸には火雷居り、腹には黒雷居り、陰には析雷居り、左のみ手には若雷居り、右のみ手には土雷居り、左のみ足には鳴雷居り、右のみ足には伏雷居り、併せて八雷神成り居りき》

右の傍線部が翻訳されず、腹と陰から生まれた雷は見えないので、英訳では生まれた雷の名前は六種になっている。にも拘らず、原文の波線部は *altogether eight Thunder-Deities had been born and dwelt there* (全部で八柱の雷の神が生まれてそこに住んでいた) と訳して、雷の数が一致しない。

③ 孝靈天皇の条

此天皇之御子等并八柱男王五女王三 《此の天皇の御子等、すめらみこと みこたち 并せて八柱ませり。男王五女王三》
御子は八とあるべきだが、

The august children of this Heavenly Sovereign [numbered] in all eleven Deities (Five kings and three queens)

と一一と訳されている。その後の版も訂正はない。フィリップイは

This emperor had altogether eight children. (Five princes and three princesses)

と、八である。なお、開化天皇の条「凡日子坐王之子并十一王」《凡て日子坐王の子、ひこしますのみこ 并せて十一王》の一一は、あは 逆した兄妹を含めた実数は一五だとして、宣長は一五と読んでいるが、外国語訳はチェンバレンの Altogether the children of King Hiko-imasu [numbered] in all eleven Kings. と同、一一である。

なお、(二)であげた例の「王」の訳語については注35で言及したので参照されたい。

九、英語ならぬラテン語の個所があちこちにある。

これこそチェンバレンの英訳本の他に類を見ない特異な特徴で、文化文明観とくに日本人の世界観や宗教観の評価に深く関わる問題なので、次節以下で言及する。

(二) ラテン語に訳された個所

コタンスキは「欧州の言語に翻訳された古事記」を論じる中で、チェンバレンに多くの言及をし、そこで、チェン

バレンのラテン語使用について次のように述べている。

西洋における先駆者の日本研究者の一人であるチェンバレンにとって、『古事記』は古代日本の習慣や宗教的かつ政治的な考え方を知らするための一級の資料であって、彼はその分野の研究で大きな貢献を果している。だが、一方で、日本文化の成果には批判的で、『古事記』の歴史学的価値には疑問をもっていた。しかも、自身の翻訳を文学的とする意欲はなく、言葉と言葉を一致させた翻訳に最も腐心した。時折、漢字のもつ意味に過度に依存している。例えば、天皇のすべての息子を《kings》と訳していて、王だと考えていたし、皇室の子孫を場合によっては《deities》と訳していて、神の教に入れていた。このような機械的な翻訳は、例えば、八重事代主神を *Deity Eight-Fold-Things-Sign-Master*（八つに折り重なった物事の印の主人の神）と訳している神の名の翻訳にも見える。同様な姿勢は、多くの歌謡の詩情が薄い翻訳法にも見られ、内包する意味を斟酌するより文字通りの翻訳が優先され、歌謡の英語への《転換》の大部分を、分かりやすい言い換えに頼っていた。

もう一つの問題は、英語の文献の中でラテン語の助けにすぎているところがあることだ。それは、『古事記』の本文の中の幾箇所かの過激な表現に関連し、また、微妙な意味合いをもった箇所である。そこは、チェンバレンが読者の耳に不快感を与えなくなかった箇所、また、植物学かつ動物学の用語でラテン語での名称はあっても英語に相当する正確な語がない箇所であった。⁽³⁶⁾

チェンバレンが英訳本でラテン語を利用した理由を二つあげているのは適切な指摘である。

一、正確さを求めた例

先に触れた佐伯彰一氏のチェンバレンの英訳『古事記』の評（六一頁）は、以下の表現の中の一言である。

やや古風で荘重、格調高い文体も印象的だったが、何よりも細部をごまかさずに、忠実な訳出ぶりについて引き込まれて読んでゆくうち、突然ラテン語がひとしきり読む箇所につづかつて、びっくりした。³⁶

同氏が「びっくりした」のは、コタンスキの言う「読者の耳に不快感を与えたくなかった過激な表現に関連する微妙な味合いのある箇所」で、チエンバレン自身が『古事記』の「卑猥な部分」と言っている箇所だろう。

チエンバレンは自身の英訳『古事記』でラテン語を使った奇妙な翻訳法について、明確な自覚があった。自身の英訳本の序文で次のようにはっきりと述べている。

『古事記』は、奇異で露骨な感じがする日本語の表現がある。そこを英語に訳すると、文体の観点からも、奇異で露骨になる。日本語そのままに英語にしない箇所は、明らかに卑猥な箇所である。従って、そんな箇所をラテン語で翻訳することへの異議は私には認められない。しかし、そのラテン語の部分は英語の部分と同じように厳密に逐語的に訳した。³⁷

これは、露骨で奇異で *bad and queer* 卑猥な部分 *indecent portions* をラテン語にした弁明であって、コタンスキが推定したラテン語に依存したもう一つの理由である。「植物学かつ動物学の用語」の場合に言及がないのは、その場合は、意味の正確さを求めた結果であるからとくに弁明を必要としなかったのだろう。

卑猥な部分のラテン語訳の具体的な事例を紹介する前に、植物学の用語の事例として三例を取り上げる。

- ① 天岩戸の段「天香山之五百津眞賢木矣根許士爾許士而於上枝」あめのなかやま いほつまほさかき《天香山の五百津眞賢木を根こじにこじて》
チエンバレンは

and pulling up by pulling its roots a true *clevera japonica* with five hundred [branches] from the Heavenly

Mount Kagu.

と英訳し、「眞賢木」は a true *clevera japonica* と訳し、イタリック体で表示した。

なお、フィリッパインは MASAK AKI trees で、ホルトは hallowed evergreen (神聖な常緑樹) と訳している。

② 八俣遠呂智について「其身生蘿及松楡《そのみにこけまたひすぎおひ》」

チェンバレンは、松は Japanese cypress でなく *chamaecyparis* を、杉は Japanese cedar でなく *cryptomeria* を用いて、Moreover on its body grows moss, and also *chamaecyparis* and *cryptomerias* と訳したことは前述した通りである(七二頁)。

因にフィリッパインはその個所を On his body grow moss and *cypress* and *cryptomeria* trees. ホルトは covered in moss, *cypress* and *ceder*. と簡潔明瞭である。

③ 倭建命の薨去の段、三五番目の歌謡

那豆岐能多能伊那賀良邇伊那賀良爾波比母登富呂布登許呂豆良 《なづきの田の稻幹いながらに稻幹はに匍むひ廻もろふ野老蔓とこらむぢら》
チェンバレンは、

“The *Dioscorea quinqueloba* crawling hither (ヤム芋の蔓が繁茂して) つじかふに絡まひつゝる and thither among the rice-stubble, among / the rice-stubble in the rice-fields encompassing / [the mausoleum]”

と訳している。野老蔓を The *Dioscorea quinqueloba* と訳したことは、ラテン語 *dioscorea* はやむ芋 a creepin plant (蔦の這う植物) であることが注記している。

フィリップパイは

“The vines of the Tōkōrō (野老の蔓) / Crawl around / Among the rice stems / The rice stems, in the rice paddies / Bordering on [the tomb].” (野老の蔓が稲殻の回りにはりめぐらしている。その田圃の中の稲殻は「墓の上で」墓標となっている)

そしてヘルトは

On bordering paddies / veer stalks of rice / veer stalks of rice / crawl round clinging / wisps of yam creeper (縁取られた稲田で稲の茎を伸ばしてやむいもの蔓の束に張り付いて絡まっている藪)

とそれぞれ訳している。

このようにチェンバレンのラテン語を駆使した訳は、植物種を厳密に示そうとしている、と理解できる。現実に証明しうる正確性を重視して、『古事記』の歴史性には疑念を抱いていたチェンバレンにとって、動植物種の特定も厳密にしなければならなかったのだろう。フィリップパイのように日本語音を残しても読者には読みにくく意味も不明だし、読者の理解しやすさを求めたヘルトのような大胆な翻訳(五六頁以下参照)もチェンバレンにはできなかったのだろう。

二、不快感を与えるという個所

チェンバレンの英訳『古事記』に物語全体がラテン語の部分があり、その顕著な例は次の三個所である。

① 国生みの段。

岐美二神が淤能基呂島に天の御柱そして八尋殿を見立てた所までが英語で、その後、それぞれの体の特徴を確認し合う遣り取りから水蛭子を生む前まですべてがラテン語、しかも、その後の、天神に相談する箇所だけは英語に戻るが、天神の指示を得て再度結婚する箇所「如此言竟而御合生子淡道之穗之狭別嶋」《如此言りたまひ竟へて御合ひまして子淡道之穗之狭別嶋を生みたまひき》の傍線部はラテン語に戻ってしまったている。この前の傍線部を、フィリップイは they were united と、ヘルトは they joined と共に日本語の「結ばれた」と訳せる英語を使っている。

いずれにせよ、岩波文庫版で倉野憲司が「二神の結婚」と題をつけた節の殆ど全部が英語ではないのである。これでは、ラテン語を理解しないと、チェンバレンの英訳本では『古事記』の cosmogony (宇宙生成論) を正確に理解することはできないことになる。

② 神武天皇の条で、伊須氣余理比賣誕生の顛末の次の傍線部。

美和之大物主神見感而其美人爲大便之時化丹塗矢自其爲大便之溝流下突其美人之富登余其美人驚而立走伊須須岐伎乃將來其矢置於床邊忽成麗壯夫即娶其美人生子名謂富登多多良伊須須岐比賣命亦名謂比賣多多良伊須氣余理比賣〔賣後改宿〕《美和之大物主神見感でて其の美人の大便に爲れる時に、丹塗矢に化りて其の爲大便の溝流下より其の美人の富登を突きたまひき。爾れ其の美人驚きて立ち走り、いすすぎき。乃て其の矢を將ち來て、床の邊に置きしかば、忽ちに麗しき壯夫に成りて、即ち其の美人に娶ひて、生みませるみ子、名は富登多多良伊須須岐比賣命、亦名は比賣多多良伊須氣余理比賣と謂す。是は其の富登と云ふ事を懸〔みて後に改へつる名なり〕》〔神典〕

このチェンバレンがラテン語にしている個所を、フィリップイは

OPOMÖNÖ-NUSI-NÖ-KAMI of MIWA saw her and admired her. / "When the maiden was defecating, he transformed himself into a red painted arrow and, floating down the ditch where she was defecating, struck the maiden's genitals. Then the maiden was alarmed, and ran away in great confusion." / Then she took the arrow and placed it by her bed. / "Immediately it turned into a lovely young man, who took the maiden as wife, and there was born a child named PÖTÖ-TATARA-ISUSUKI-PIME-NÖ-MIKÖTÖ. Another name was PIME-TATARA-ISUKÈ-YÖRI-PIME. / The name was later changed to this because of dislike for the word potö."

と英訳している。これを反訳すると「美和之大物主神は彼女を見て素晴らしと思った。そして、乙女が排便をしているときに、自身を赤い矢に変身させ、その排水溝に流れ着いて乙女の陰部を突いた。すると、乙女は驚愕して混乱に陥ったが、続いて、その矢を取って、自分の寢床の横に据えた。その矢は愛すべき美男になるやいなや、乙女を妻とし、富登多多良伊須須岐比賣命が生まれた。その比賣命の別名は比賣多多良伊須氣余理比賣という。その別名はホトマしく思わずに、後になって代わりに名付けた名である。」となる。

③ 景行天皇の条

東国征旅を終えて尾張に帰った倭建命に美夜受比賣が大御酒盞を獻じた後の「爾美夜受比賣其於意須比之欄著月經故見其月經御歌曰」から唱和した二人の歌も含めて「故爾御合而」までのすべてがラテン語で「以其御刀之草那藝劍置」になってや々と英語になる。岩波文庫版の倉野憲司の訓読だけを左に示した。この歌謡を含めた全文がラテン語である。

ここに美夜受比賣、それ襲の欄に、月經著きたりき。故、其の月經を見て御歌よみしたまひしく、「ひさかたの

天の香具山 利鎌にさ渡る鶴 弱細手弱腕を 枕かむとは我はすれど さ寝むとは我は思へど 汝が著せる襲の裾に 月立ちにけり」とうたひたまひき。ここに美夜受比賣、御歌に答へて曰ひしく、「高光る日の御子 やすみし我が大君 あらたまの年が來經れば あらたまの月は來經往く 諾な諾な諾な 君待ち難に 我が著せる襲の裾に 月立たなむよ」といひき。故ここに御合したまひて⁽³⁸⁾

以上の三個所が話の全体が英語でない典型で、その他に行動や様子を描写した部分だけがラテン語の例として次の八箇所があげられる。その部分について、まず原文とその宣長の訓を掲げ、ラテン語に訳されている部分に傍線を付し、そのラテン語をへゝ内に示した。続いて、フィリップの英訳を掲げ、そこでもチェンバレンがラテン語にした箇所を傍線で示し、かつその部分の反訳を添えた。

④ 速須佐之男命が誓約に勝つたとして暴れた後。

天衣織女見驚而於梭衝陰上而死 《天衣織女見驚きて梭に陰上を衝きてみ死せき》

《impegerunt privatas partes adversis radiis et obierunt》

The heavenly weaving maiden, seeing this, was alarmed and struck her genitals against the shuttle and died.

「天の機織り娘は、それを見て驚き、杼で陰部を突かれて死んでしまった」。

因みに、天之衣女をチェンバレンは women と複数に訳しているが、フィリップもヘルトも単数である。

⑤ 天岩屋戸の段で天宇受賣命が踊った場面。

爲神懸而掛出乳裳緒忍垂於番登也 《神懸為て胸乳掛き出で裳緒を番登に忍垂れき》

<usque ad privates partes>

Then she became divinely possessed, exposed her breasts, and pushed her skirt-hand down to her genitals.
「そこで、彼女は神懸かりになって胸を露出させ、スカートの帯紐を自身の陰部の下にまで降ろした」

なお、この場面についての見解を求められたレヴィーストローは、「アメノウズメの淫らな踊り」と題した文章で、ヘロドトスの記述を参照して次のように述べている。

女性器を見せるというおどけたしぐさで何かを暗示することが、幾世紀にわたってエジプト文明のなかで続いた特性の一つだったように思われる。⁽³⁹⁾

⑥ 速須佐之男命が「八雲立つ出雲八重垣」の歌を詠んだ後。

「櫛名田比賣以久美度邇起而所生神名謂八嶋士奴美神」《櫛名田比賣を以て久美度に起こして生みませる神の名を八嶋士奴美神と謂ふ》

<Quare, quum incepit in thalamo [opus procreationis] cum Mirâ-Herâ-Inadâ, procreavit Deum nomine Eight-Island Ruler.>

Then taking KUSUNADA-PIME he commenced procreation, and there was born a deity named YA-SIMAZINUMI-NÔ-KAMI 「櫛名田比賣を誘い子造りを始め、八嶋士奴美神が生まれた」。

⑦ 根国で大穴牟遲神から得た大刀・弓で八十神を征伐し国を作った時。

「八上比賣者如先期美刀阿多波志都」《八上比賣は先の期の如みとあたはしつ》

〈Quamobrem Hera Yamaki, secundum antierius pactum, [cum eo] in thalamo coiviti.〉〔cum eo〕なり〔
はチエンバレンが原文にない語を補足した語。以下同じ〕。

YAGAMIPIIME, in accordance with their previous betrothal, shared the conjugal bed 「八上比賣は、先の婚約の
通りに夫婦で床を共にした」。

⑧ 上巻の大国主神の物語。

沼河日賣が須勢理毘賣命の嫉妬を畏れて、大国主神と「其夜者不合而明日夜爲御合也」《其の夜は合はさずて明
るひの夜御合為たまひき》

〈Quamobrem eā nocte non coierunt, sed sequentis diei nocte auguste coierunt〉

They were not united that night, but were conjugally united the following night. 「二人はその晩に結ばれず、
翌日の夜に夫婦の結合をした」。

⑨ 邇邇藝能命が木花之佐久夜毘賣に求婚した時の言葉。

「答白我姉石長比賣在也爾詔吾欲目合汝奈爾詔吾欲目合汝奈何」《我が姉石長比賣在り」と答白したまひき。爾
れ詔りたまはく「吾汝に目合せむと欲ふは奈何に」

〈Then he charged her, [saying]: "Ego sum cupidus colendi tecum. Tibi quomodo videtur?"〉

"I wish to marry you. What is your wish?" 「結婚して下さる。お氣持はいかがですか」。

⑩ 応神天皇の条にある天之日矛の物語の冒頭で、昼寝をしていた賤女が赤玉を生む話。

「此沼之邊一賤女晝寝於是日耀如虹指其陰上」《此の沼の邊に、一賤女晝寝したりき。ここに日の耀虹の如其の陰上を指したるを》

〈On the bank of this lagoon a certain poor girl was [taking her] midday sleep. Tunc solis radii, coelesti arcui similes, in privatas partes impegerunt.〉

By this swamp a woman of lowly station was taking a noonday nap. Then the rays of the sun shone upon her genitals like a rainbow. 「この沼の辺で身分の低い一人の女が昼寝をしていると、太陽光線が虹のようになって彼女の陰部に差し込んだ」。

⑪ 安康天皇の条。

「大日下王者不受敕命曰己妹乎爲等族之下席而取横刀之手上而怒歎」《大日下王は勅命を受けたまはらずて、己が妹や等族の下席に爲らむといひて、横刀の手上取りしぱりて怒りました》

〈“King Oho-kusaka would not receive the Imperial Commands, but said: “An soror mea fiet ejusdem stirpis [viri] inferior storea?” and, grasping the hilt of his cross-sword, was angry”.

Is my younger sister to be the sleeping mat for (one of) an equall ranking clan? 「同じ身分の一族の一人の寝床の敷物のような妃にするつもりか、そうはさせない」と言つて、太刀の柄を握つて怒った」

以上十一箇所の外に、単語だけのラテン語もある。多くが夫婦関係や出産に関わる言葉で、例えば「くみど」「ほ

と「まぐはひ」「みあひ」「よばふ」「まく」「めす」等々がある。ここでは「くみど」「まぐはひ」「ほと」の三例を検討する。

「くみど」は、国生みの段で蛭子を生んだ後に生殖行為をやり直す箇所（八一頁）と速須佐之男命が「八雲立つ」の歌を詠んだ後に櫛名田比賣と八嶋土奴美神を生んだ箇所（八四頁）の僅か二例見えるだけで、共にラテン語になっている。

「まぐはひ」は、ラテン語に訳された段落の原文は引用しなかったが、右の二の①「国生みの段」（八一頁）の中の「爾伊邪那岐命詔然者吾與汝天之御柱而爲美斗能麻具波比」（ここに、いざなぎのみこと、しからは、あとなどこのあめのみはしらをゆきめぐりあひて、みとのまぐはひせむ）はラテン語に訳された中にあるので当然ラテン語である。だが、宣長が「まぐはひ」と訓読した次の四箇所を、チェンバレンは次のように英訳している。

① 故隨詔命而參到須佐之男命之御所者其女須勢理毘賣出見爲目合而《故れ詔命の隨に須佐之男命の御所に參到りしかば、其の女須勢理毘賣出で見て目合爲て》

So on his obeying her command and arriving at the august place of His Impetuous-Male-Augustness, the latter's daughter the Forward-Princess came out and saw him, and they exchanged glances and were married.（二神は視線を交わして結婚した）

② 豊玉毘賣命思奇出見乃見感目合而《豊玉毘賣命奇しと思ほして出で見て、乃ち見感でて目合して》

Then Her Augustness Luxuriant-[Jewel]-Princess, thinking it strange, went out to look, and was forthwith

delighted at the sight. They exchanged glances (「二神は視線を交わした」)

- ③ 赦其賤夫將來其玉置於床邊即化美麗孃子仍婚爲嫡妻《其の賤夫を赦して、其の玉を將ち來て床の邊に置けりしかば、即ち美麗き孃子に化りぬ。仍れ婚して嫡妻と爲たりき》

Forthwith it was transformed into a beautiful maiden, whom he straightway wedded, and made his chief wife. (すぐに美女に変身したので、男は迷いなく結婚して彼女を正妻とした)

- ④ 爾伊豆志袁登賣思異其花將來之時立其孃子之後入其屋即婚故生子一也《伊豆志袁登賣其の花を異しと思ひて將ち來る時に、其の孃子の後に立ちて其の屋に入りて即ち婚ひしつ。故れ一子を生みたりき》

Then, when the Maiden-of-Idzushi, thinking the blossoms strange, brought them [home, the Youth-of-the-Haze-on-the-Spring-Mountains] followed behind the maiden into the house, and forthwith wedded her. So she gave birth to a child. (そつじつ) 花が咲くのが奇妙に思つて持つてくるときに、「春山霞壯士は」その孃子の後を追つて、伊豆志袁登賣の家に入って結婚した。そして一子を儲けた。

以上の例から、チェンバレンが「まぐはひ」という訓む語があれば必ずラテン語にする、というわけでもないことがわかる。むしろ英語の方が卑猥さが出ない場合には、英語にしたのである。次の「ほと」もそうした例となっている。

「ほと」は陰・蕃登・番登・富登などの表記で、全部で一一例見えるが、チェンバレンの場合は、その語を含む一節すべてがラテン語の場合は *privatas partes* とラテン語であるが、その他は *private parts* という英語で一貫してい

る。一方、その個所をフィリップパイは生殖器・性を示す英語 *genitals* を当てている。ラテン語で *genitals* とは「生殖の・出生の・多産」等の意味の形容詞で、それが身体の一部を示す名詞になった *genitale* は「生殖器」を示す。そこから派生した英語の *genitals* を使ったフィリップパイの用法は *private parts* を使ったチェンバレンより直裁的な語感があるのではないかと思われる。

このことを感じさせる例として、既に前述の二の⑩（八六頁）で言及した応神天皇の末尾の天之日矛の物語の次の用法がある。その「於是日耀如虹指其陰上」《ここに日耀虹のことそのほとをさしたる》をチェンバレンは、

Tunc solis radii, coelesti arcui similes, in Privatias partes impegerunt.

と全文がラテン語なので、陰（ほと）もラテン語であるが、その他の陰は殆ど英語の *private parts* と訳している。ここをフィリップパイは、次のように訳している。

By this swamp a woman of lowly station was taking a noontday nap. Then the rays of the sun shone upon her genitals like a rainbow.

つまり、チェンバレンは「ほと」の翻訳に際して、生殖器を示すラテン語由来の *genitalia* を使わずに、ありのままの表現ではない婉曲表現 *private parts* を使ったのである。その表現は一八世紀後半から使われ出した語だと、『ラナムハウス英和大辞典』（第二版・小学館・1994）などに説明がある。

この「ほと」の翻訳でラテン語系の *genitals* を使わずに英語の *private parts* を使った姿勢から、却って、卑猥な語感を避けたいチェンバレンの強い意識が見えてくるのである。

ところで八の②で述べたように（七五頁）、チェンバレンは黄泉国訪問譚で「於腹者黒雷居於陰者析雷居」《腹には黒雷居り、陰には析雷居り》の傍線部を翻訳しなかったにも拘わらず、原文の「并八雷神成居」はそのままだ

altogether eight Thunder-Deities had been born and dwelt there (全部で八柱の雷の神が生まれてそこに住んでいた)と訳している。しかし該当箇所が付した注では、英訳の本文にない二雷の原典の名を Kuro-kadzuchi と Saki-kadzuchi とローマ字で音写して出している。雷の数も注記もその後刊行されている Tuttle 版でも変わっていないことから、誤植だと片付けるべきではなく、むしろチェンバレンの忌避する「陰」という語のある箇所であったためであろう。

以上縷々述べてきたように、チェンバレンの英訳『古事記』にはラテン語が溢れている。本文ばかりか、天岩戸の段の「取天金山之鐵而求鍛人天津麻羅而科伊斯許理度賣命令作鏡《天金山の鐵かねを取りて、鍛人天津麻羅かぬちあまつまらを求まぎて、伊斯許理度賣命しこりとのおのみことに科おほせて鏡を作らしめ》」の「天津麻羅」の語釈の注つまり語の理解を助ける注ですら、その意味をラテン語で示している。十九世紀の西洋の知識人にまだラテン語が通用していて、『古事記』を読む読者層にはラテン語の説明でも語義を理解してもらええると思つて、チェンバレンは、ラテン語の使用にそれほど違和感をもたれないと思つていたのであろうか。

(三) ラテン語使用の理由とその意味

ラテン語の箇所の殆どが結婚や生殖行為に関連した出来事であることは、チェンバレンが明言した「卑猥な表現を避けるため」であることから、理解できるが、そんな関係の箇所や言葉のすべてが一律に英訳を拒否されている、と予想すると当たらない。

そんな行為を予想させるいくつかの「婚」の字が使われた原文の英訳例を見てみよう。

「婚」の字は、『古事記』で三〇箇所ほど使われている。宣長は、その「婚」に一定の同じ訓を与えずに「あふ・あ

はす・たはける・みあふ・めづ・よばふ」等々文脈に応じて訓んでいる。その中で、「みあひ」の例が最も多く、いずれも *wedded* と英訳されている。

既述の二の⑨（八五頁）のラテン語に訳された「吾欲目合汝奈爾詔吾欲目合汝奈何」（吾汝に目合せむと欲ふは奈何に）の後の次の箇所

「唯留其弟木花之佐久夜毘賣以一宿爲婚」（その弟、木花之佐久夜毘賣をみ留めて「よみとあたはしつ）でも、次のように極く普通に英語 *wedded* と訳されている。

He wedded for one night. (一晩夫婦として結ばれた)

わらに、宣長が「あはせ」と訓んだ次の例も、give him her in marriage、結婚と普通に英訳されている。

坐其上而具百取机代物爲御饗即令婚其女豊玉毘賣。故至三年住其國（その上に坐せまつりて百取机代物を具へて御饗して即ちその女豊玉毘賣を婚せまつりき。かれ三年といふまでその國に住みたまひき）

and setting him on the top of them, arranged merchandise on tables holding an hundred, made an august banquet, and forthwith gave him his daughter Luxuriant-Jewel-Princess in marriage. So he dwelt in that land for three years.

宣長の訓で婚を「まぐはひ」と訓ませる例は、既に言及した二の③と④（八八頁）の二箇所あり、そこでも共に *wedded* と訳されていた。繰り返すが、チェンバレンにとって、結婚に伴う行為とくに「まぐはひ」に逢えば必ずラテン語にするというわけでもなかったのである。

ではラテン語にしなければならなかった基準あるいは理由は何だろうか。

佐伯彰一氏は先に引用した「ラテン語にぶつかってびつくりした」という言葉に続いて、

古代ぶりのエロスの直截さを、そのまま英語に訳出するのがはばかれたに違いない、いかにもヴィクトリア朝紳士らしい慎み深さであり配慮であるとはほほ笑まされる一方、こうした箇所を難なくラテン語に切り替えて訳出して見せる練達の手腕に舌を巻かずにいられなかったものだ。⁴⁰

と述べ、「ヴィクトリア朝紳士らしい慎み深さであり配慮」を要因としてあげている。平川祐弘氏もまた「チェンバレンは典型的なヴィクトリア風英国紳士である」と述べ、共にヴィクトリア時代の思潮に言及している。後者はハーレンからの日本人との結婚の相談へのチェンバレンの反応に対する評価⁴¹だが、両者の指摘からチェンバレンが十九世紀の世界を支配した西洋知性の典型の人であったことが窺える。その典型とは、本稿の視点からは、未開や古代社会に「進化に取り残された生活態度し⁴²かみようとしなかつた自民族中心主義」で、「ヴィクトリア時代人にとつては、西洋文化とは他の諸文化を評価する手段」とした思潮であるとG・ルクレールが表現した内容だと理解できる。チェンバレンの『古事記』の文体は奇異で露骨で、卑猥ですらあり、美は全くないという揺るぎない判断は、その立場から生まれ出てきたのである。このことは、佐伯彰一氏がチェンバレンの日本文化観について、

文化日本文学に対する見方と態度には、最後まで一歩離れて、冷たく突放すようなところがあった。いや更には一段上の高みからこれを見下し、裁断するような趣さへ付きま⁴³とつていたことを見逃すことは出来ない。⁴³と評し、平川祐弘氏が

チェンバレンの日本文学に対する価値評価は、生涯を通じて、徹底した西欧優位の視角の下に行われた⁴⁴と指摘した姿勢そのものであった。この価値観から、チェンバレンは英訳書の序文にある「ラテン語の使用を否定する理由はない」という確信をもって英訳『古事記』を完成させた。その異様な翻訳法は、一九世紀西洋人の日本文化観に関する貴重な事例を提供してくれている。そして、ハーレンとチェンバレンの「破られた友情」は、この対峙する

日本文化觀の具体的な事例を我らに知らしめてくれる出来事だったのだ。

四 チェンバレンとラフカディオ・ハーン（小泉八雲）

外人であつて日本に來り、この社會を見、この文化に親しみ、この國民と歴史との研究に身を委ねて殆ど終生の業となし、歐米に盛名を馳せた人は必しも少しとせぬ。東京大學で最初の國文學を擔任したチェンバレンと、日本を愛して世界に其の美しさを紹介した文豪ハーンとが、其中の尤なるものであることは語るまでもない。⁴⁵

以上は、牧健二『近代における 西洋人の日本理解』の序文の最初の段落の言葉である。こうした評価を示すためか、同書の口絵にはチェンバレンの自署のある肖像写真が掲げられている。

チェンバレンとハーンは生年が同じで、前者は明治六年（一八七三）満二二歳で來日、後者の來日はその一七年後。その際、ハーンはチェンバレンを頼つて、生活の基盤を得た。佐々木信綱はチェンバレンの教師としての心根について、「頗る義侠の念に富まれたるは、朝鮮亡命の士なる金玉均と相往來せしこと、日本に來りて横濱に上陸するやまづ先生をおとなひつる當年のラフカディオ・ハーンを好遇し、松江の中學に、熊本の第五高等學校に推輓せられ」と述べている。ハーンに松江そして熊本の教師の場を周旋したのはチェンバレンであつた。⁴⁶

以來、両者は頻繁に手紙を遣り取りするなど、交流を深めた。とくに、赴任先の熊本に馴染めず、熊本を訪ねた後のチェンバレンから「あなたが出雲におけるよりは幸福でなくなったという印象をうけた」と書かれた手紙が届いたり、その後、ハーンは、自分の機嫌が悪い一因は「ここで見るわざとらしい種類の國民道德と出雲の真面目な深い根柢のある種類の國民道德と対照」のためだとする苦衷をチェンバレンへ書き送っていたりしていた。⁴⁷

それほど親しい間柄であつて、チェンバレンの歿後一二年の忌辰に刊行された佐々木信綱編集の追悼冊子『王堂チェンバレン先生』に「ラフカディオ・ハアン」と題するチェンバレンの文章が小花清泉という方の邦訳で収載されている。明治三十九年（一九〇六）一月の日付があるその短文は、次の感懐から始まっている。

ラフカディオ・ハアンに對する余の思ひ出は、宛然一場の夢のごとくなりぬ。樂しき夢の常とて、余が思出の夢も亦、餘りに短しとおもはるゝばかりなり。^⑧

ハーンの他界は明治三十七年（一九〇四）。その二年後の「思ひ出が一場の夢となつた」という一句は、後段でハーンの才能と人柄を賛美する言葉が続いていることから、永訣の嘆きの頌だと読むべき文章である。チェンバレンは一九一一年に離日し、一九三五年の他界なので、右の文は自身が歿する一七年前、日本滞在中の執筆となる。両者の密なる親交が窺える一文である。平川祐弘氏の『破られた友情』に全文が収載されている。

チェンバレンの日本の国語学を牽引した研究者を育てた業績や『王堂チェンバレン先生』の薰陶を得た人々の発言を思えば、彼が日本の文化と人々に情愛を注いでいたと想定されもしよう。だが、既に見たように、彼は日本の文化に對して「一段上の高みからこれを見下し、裁断するような趣」もあつた。そして、チェンバレンとハーンの日本観が對極的だつたことと、最晩年に前者が後者を否定したことを知る後世の我らには、チェンバレンの追悼辞の「夢」の一言が、深い友情が夢幻であつたことを暗示するかの如くに響いてくる。

牧健二氏は、チェンバレンについて、

彼に於て最も特色的なところは、日本政府が強制していた日本史に對する天皇中心的解釋の中に含まれた不可解を忌憚なく指摘した所にある。．．．彼の見方は彼の親友であつたハーンと丁度反對で、宗教的要素を少しも考慮せず、歴史を合理的に、従つて凡て功利的精神に立つものとして解釋するのであつた。．．．實證を

重んずる彼は非合理的な日本思想に對して同情ができなかつた。⁽⁴⁹⁾
と指摘し、チェンバレンとハーンとの日本文化觀の違いを次のように明確に對照させて評価した。

天皇崇拜と愛國心とは明治以後政府の官僚がでつちあげた新宗教であると論じたチェンバレンに比較すると、祖先教の古さを説いたハーンの方が日本精神をズットよく知つていたと云えよう。⁽⁵⁰⁾

なお、築島謙三氏は、次の評価を紹介している。

S・B・サンソム卿は、チェンバレンは不注意、不正確なものに對し憎惡の心がつよく、慎重な研究者であつた、と記している。⁽⁵¹⁾

サンソム『西欧世界と日本』の記者解説には、同卿がチェンバレンを敬慕した四つの理由が紹介されている。豊富な語学力と教養と経験、明快達意の文章力、正義を求める謙虚さの三つの前にまず「学者としてもつとも肝要な道德たる真理追究の欲求 (desire for truth) をもつていた」⁽⁵²⁾ことがあげられている。サンソムがチェンバレンの合理精神と実証主義を基準に言語学者として高く評価していたことが窺える。

五 ラフカディオ・ハーンと『古事記』

ハーンは、ニューヨークで旧知の

「ハーバース・マンズリー」の美術主任のバットンという記者と会つた。そしてたびたび訪問した。バットンは日本の美術にくわしく、本も沢山持っていたからである。チェンバレンの英訳「古事記」を読んだのもこの人の本であつた。この人に会つたことが日本に渡る直接の機会となつたのである。⁽⁵³⁾

と、築島謙三氏はハーンと『古事記』の接点について書いている。前後の同氏の記述から、このハーンと『古事記』との出会いは彼の来日一年前だったと推定できる。そのことは、小泉凡氏がハーンの『古事記』との出会い⁵¹という一節を設けて資料に基づき証明している。小泉氏は、本を借りたことへのハーンのパットンへの礼状を『ラファディオ・ハーンのアメリカ時代』（E・L・ティンカー著、木村勝造訳）から次の一節を一部改変して引用している。⁵²この極めて珍しく、価値ある書物を貸してくださった非常なご親切に感謝します。それは言葉に尽くせません。それらはみな初見のものであり、見るのはとても楽しみです。とくにチェンバレン氏自身の『古事記』の訳と、

—日本の神話と言語の形成に対するアイヌの影響の民族学的研究には特に興味を引かれました。

この引用に続いて小泉氏は、ハーンは、翌年、日本行きが実現し、横浜に到着してこの国に腰を落ち着ける覚悟を決めると、改めて英訳『古事記』を購入入しました。その本は、八雲の蔵書二四三五冊を保有する富山大学ヘルン文庫にあり、『Lafcadio Hearn』《Yokohama 1890》と自筆で記されています。

と、ハーンの『古事記』への感心の深さを指摘し、さらに精読していたことを明らかにしている。

八雲が購入したのは『日本アジア協会紀要』第十巻別冊として出版されたチェンバレンの英訳『古事記』で、本文だけでなく脚註にも、八雲の蔵書としてはかなりの書き込みが見られます。しばしば、その項目に連動すると思われる頁数が記されているので、関連項目を参照し、行きつ戻りつしながら精読した痕跡がうかがえます。

ここから八雲が、チェンバレンの英訳に他の書にはない数多い詳細な書き込みをしていたことが予想され、さらに既に見た通り、ハーンは神社や神道を語る際に、しばしば『古事記』の名をあげ、また引用していることを考え合わせる⁵³と、牧野陽子氏の「古事記はハーンのアートブック」だったという指摘が髣髴とする。

だが、ハーンにはチェンバレンの日本宗教は未開だとする観点の影響は及ばず、チェンバレンとは正反対の自身の神道観が揺れることはなかった。この両者の文化観の比較を語る方々の論考から、ハーンが『古事記』の知識をチェンバレンに依拠しながらも、日本宗教は未開だと断じたチェンバレンの影響に囚われなかったと判断できる。そして、両者の相違から一九世紀西洋知識人の神道観が鮮明に浮びあがってくるのである。

『古事記と小泉八雲』の編著者の一人の池田雅之氏は、

ハーンは詩人肌の作家であり、チェンバレンは手堅い実証主義を旨とする言語学者でした。．．．直観的洞察力のあるハーンと実証主義で西欧至上主義のチェンバレンの『古事記』観の比較から、何か新しい視座が見えてくるかもしれません。⁶⁶

と述べている。「新しい視座が見えてくる」のは、両者の日本理解が対極的な典型だからで、チェンバレンの『古事記』理解を論じる本稿でも、ハーンを鏡とすればそれが鮮明に浮かびあがってきた。池田氏は、ハーンとチェンバレンの『古事記』への向い方を、『いきるよすが』としての神話VS「言語の病」としての神話」と鮮明に対峙させた。「言語の病」とはやや穏やかならざる表現だが、英語で myth 神話の対義語とされるのは事実や現実や実在を意味する reality なので、神話が語源的にも「訳の分からない話」の意味を含んでいて、『古事記』をその立場から考える立場を言っているのである。従って、前章で引用した牧健二が使った「でっちあげ」とさほど遠い意味ではないが、その和語に比べれば、チェンバレンの立場を『古事記』の言葉を「言語の病」とした考えたことが、「一九世紀前半のイギリスのヴィクトリア朝を支配していた『進化論』的な発想」に残存し、チェンバレンもその影響下にあつたからだと説明する池田氏の指摘が、既に言及してきた様々なチェンバレンの研究の立脚点の指摘とびつたり符合すると思われる、納得もできる性格付けであろう。

一方、池田氏がこの比喩的対峙を発表した四〇年前、西郷信綱氏がチェンバレンについて、次のように述べていた。古事記の非神話化の問題を考える上に見のがせない資料は、チェンバレンの英訳古事記（明治十六年）の序であろう。人類学の祖といわれるタイラーなどをすでに読み、近代実証主義を身につけたこの有能なコスモポリタンの目には、国学以来の日本の古典学にいわば貼りついている精神上また方法上の偏狭さはまる見えであったわけだが、この英訳古事記の序が『日本上古史評論』（明治二十一年）という名の小冊子として翻訳されている。⁵⁷

この主張は、根本的また急進的や過激的をも意味するラディカル radical という語を連想させ、半世紀以上前に、史的関連から『古事記』を見る時代の風潮を超越した論考『古事記の世界』（岩波新書、昭和四二年）が、チェンバレンの近代実証主義を国学以来の「日本の古典学の偏狭」の殻を破る「非神話化」の見本だと高く評価し、国学に否定的な立場の研究であったことが再確認させられる。そして、遠田氏の指摘も思い出されてきた。遠田氏は、ハーン
の神道信仰に対する姿勢について

ハーンが異様なほどの自信をもって、サトウやチェンバレンの神道論を、文献のみに限り国民心理を解さぬものとして斥けたのは、たんに出雲大社やその歴史を知ったからではない。そこに根付く信仰と、神道が民族宗教としてもつ力と、さらには近代国家における有効性をも、はつきりと見定めていたからなのである。

と捉え、「神道を理解する有力な手掛かりは、神道そのものの杜にしかない」と断じている。⁵⁸ 遠田氏のこの表現は、「神道の理解は自らを鎮守の森と祭りの現場に浸すことにしかない」と言い換えることができるだろう。

本稿は、チェンバレンの『古事記』観を探究する過程で、『古事記』と小泉八雲との関わりに触れるようになった。本稿の課題である『古事記』の翻訳法という視点からは、日本語の読解力からハーンに翻訳書は考えられないので、両書の翻訳の仕方の比較は不可能である。ハーン『古事記』観は本稿の課題ではないが、ハーンがエッセイ「八重

垣神社」でチェンバレンの英訳をどのように引用したのかを示すことが出来たので、両者が『古事記』に「いきるよすが」を見たか否か、日本とその文化に対する両者の姿勢の相違の一端は示し得たと思う。

六 『古事記』の宇宙生成観 cosmogony と生殖行為 procreation

(一) 『古事記』は閨房の書か

チェンバレンの英訳でラテン語の個所の大半が生殖行為に関わる表現であること、そして、その翻訳は一九世紀英國のヴィクトリア朝時代の謹厳な思潮の反映であるという指摘も紹介した。その指摘が正鵠を射ていることは、筆者が『大倉山論集』第五三輯（平成一九年）の『『古事記』と『神典』』なる論文で指摘したアストンも英訳『日本書紀』で、第四段第五の一書の「美哉善少女遂將合交而不知其術時有鵲飛來搖其首尾二神見而學之即得交道あなにかやえをとめ。遂に合交みあひせむとして其の術を知らず。時に鵲はくなぶりあり。飛び來て其の首尾かしらをただく。二神見して之に學まなひて即ち交道とごのみちを得つ」という部分をラテン語にしていることを思い合わせれば、肯定できるだろう。

さらに、筆者は、その拙論で、

『古事記』が閨房の書であるとは思えないが、『古事記』自身にそうした性格が潜んでおり、そこに注目した人々は戦前も戦後も日本の社会に存在するのであって、十九世紀のイギリス人が『古事記』を卑猥な表現のある書として翻訳に苦心したことが的外れな『古事記』理解だったと決めつけることはできないだろう。⁽³⁹⁾

と述べつつ、出久根達郎が幸田文のエッセイ「こんなこと」で人間の秘事を綺麗に表現する方法を学ぶために『古事記』を読めと父露伴から教えられたと述べていることなどを紹介した。

新渡戸稲造も『古事記』の国生み物語の英訳の際に注を加えないではおかなかつた。それは、生殖行為による国生みが当時の新渡戸にとって日本の神話や宗教の理解の躰きの石であったことを示してはいないだろうか。新渡戸は、天之御柱について「Hertleinが古代サクソン人が崇拜していた聖なる支柱 Iminsuhn について示唆しているように天を助けることが中心の思想なのか、あるいは古代ヘレニズムの天柱に関係があるのかあるいは旋回占いなのか」と様々な説をあげ、自身の判断は保留しつつ、さらに続けて

この御柱を巡るといふ考え方の起源が男根崇拜と豊饒の呪文であったのはあり得ることだ。メイポールと同じ意味があることも殆ど疑いがない（フレイザー『金枝篇』参照）。とくに、女性の生殖力の強化を樹木に原因を求めるマオリ人の「Hoo」族の信仰は注目し得る。不妊の女性はその腕でその木を抱きしめれば、彼女が西側を抱くか東側を抱くかによって男か女かの子供を得るのである。木の異なる方向を抱えるというのは当然その周りを回ることを示唆している。マオリ人は木がこの力をもっていると信じている。ヒマラヤの Schius 人は「[Schill]の木にそれと同じ力があると信じている。Kara-Kirugisten 族の間では、一本だけ孤立して生えているリンゴの木が多産をもたらすとされている（更に他の例は Ploss-Bartlis の “Das Weib” を参照⁶⁰）。御柱は、結婚したときに男女が自分を見せる前に現れる先祖の象徴であるトーテムポールなのだろうか。

と述べている。ここで、とくに新渡戸が岐美二神の国生み物語の理解の際に文化人類学、民族学的な視点から考察が加えられていることに注目したい。

古代の宗教的活動によく見られる儀礼における生殖行為を思わせる所作は、一九世紀の学問にあつては、未開の未発達の宗教の象徴とされてきたのではないか。民族学的学問の潮流は、やがて、チェンバレンが英訳するに堪えなかつた記述を肯定的に捉える思潮を導いたのではないだろうか。古代宗教を肯定的に見る姿勢がない限り、人の生殖

行為は未開だとして斥けられるだろう。一九世紀の西洋人としてチェンバレンは『古事記』にその未開性を見ていたのだが、それは、英国だけでなく、一九世紀の潮流であった。しかし文化人類学の未開社会の発見により、そうした視点は今や克服されているのだろう。

(二) 聖婚 hierogamy

チェンバレンが物語全体をラテン語で示した岐美二神の国生み譚の理解のために、新渡戸稲造はフレーザーの『金枝篇』を参照していた。その『金枝篇』は、第一章「植物生育に対する性の影響」と第二章「神聖な結婚」の章を設け、第一章は、次の言葉で始まっている。

ヨーロッパにおける春の祭り夏の祭りについて……われわれは次のように推断することができる。すなわち、われわれの未開な祖先たちは、植物生育の力を男と女とに人格化して考え、類感呪術または模倣呪術の原理に立って、五月の王と王妃、聖霊降臨祭の花婿と花嫁などの形を取る森林の神々の結婚をまねることによって、樹木や植物の生成を促進しようと考えた。⁽⁶¹⁾

さらに、同じ段落で、結婚をまねる儀式につきものの乱行は「偶発的なものではなくて、かつては儀礼そのものの本質的な部分で」、儀礼の効果は「人間の両性の実際の結合なしには実を結び得ないとされていた」と指摘している。また、同章には、次の指摘もある。

ヨーロッパの各地でも、人間の両性間の関係は植物生育を促進するために利用できるという明らかに同様な原始的観念に基づく習慣が、春と収穫時にあまねく行われている。⁽⁶²⁾

『金枝篇』の初版は一八九〇年で、最終決定版は一九三六年、右の言及で「行われている」と現在形で記述されて

いることに興味が惹かれるが、ともあれ、以上は、「人間の両性間の関係」の文化現象を「聖婚」として認める早い時期の言及ではないだろうか。

小口・堀監修『宗教学辞典』には「神婚」という項目が立てられ、その中に

古代ローマの密儀も男女の祭司による神婚の摸擬化や男根の例が中心であり、その影響は広くヨーロッパに伝播して中世以来のキリスト教支配下の祭儀や習俗を色どっている。⁽⁶³⁾

という説明がある。ミルチャ・エリアーデ Mircea Eliade (1850-1904) は、

女性を鋤き返された地面と同一視することは、多くの文化に見出され、ヨーロッパの民間伝承にも保存されている。⁽⁶⁴⁾

と述べている。また、

夫婦間の結合は宇宙論的なリズムに統合される儀礼であり、その統合によってその行為が正当化される。……性行為と農耕作業の同一視は多くの文化にしばしば見られる。⁽⁶⁵⁾

と指摘しつつ、その実例を幾つかあげ、

収穫祭のとき中部及び北部ヨーロッパに原則的に見られる放態―これに対して教会当局がいたく争ったが、これを禁止させることは出来なかった。⁽⁶⁶⁾

とも語っている。この教会当局の争いは、五九〇年のオーセレン Aukere 会議のことだそうだが、その後の教会と民間の民俗的行事との関係で続いた緊張感でもあるのだ。エリアーデの次の指摘は、キリスト教世界に伏在する古代的要素の根の深さの指摘である。

東西キリスト教会は、あまりに多くの異教的要素を受容したとして非難されてきた。これらの批判が常に正当で

あるか否かは疑問である。一つには、「異教」は、表面的ではあっても、「キリスト教化」された形でのみ残存できたのであった。この絶滅できない「異教」同化政策は、目新しいことではなく、原始教会はすでに前キリスト教時代の聖暦の大部分を受容・同化していたのであった。他方、農民はかれらの宇宙における生存様式のゆえに、「歴史的」道徳的キリスト教に惹かれなかった。農民に特有な宗教経験は、「宇宙的キリスト教」と名付けられるものによって培かれた。いいかえれば、ヨーロッパの農民はキリスト教を宇宙的儀礼として了解していた。……旧約聖書の預言者に烈しく攻撃され、キリスト教によって辛うじて許容された宇宙のリズムへの神秘的感情移入は、特に東南ヨーロッパでは、農民の宗教の中枢を成すものである。⁽⁶⁷⁾

エリアーデは、農耕民族の多くの民族に、男根を鋤とそして女性を鋤き返された地面と同一視する考えが見出され、ヨーロッパの民間伝承にも保存されていることに注目していた。そして、女性の生殖能力を重視した古代世界の意義を次のように述べている。

人類—大地 anthropo-telluric の比較は、ただに農耕と妊娠の真の原因とを、ふたつながら理解し得た文化内においてのみ起り得ることである。……この男根—鋤の同一視は、絵画的にまで表現されている。この表出の起源ははなはだしく古い。……この種の原始的直感は、話し言葉だけでなく、真面目な著者たちの語彙からさへ消え去るのに長い時間を要した。⁽⁶⁸⁾

欧州にも豊饒なる母なる大地という信仰の存在を認めているのだ。これは、『古事記』の国生み物語などの記述を、単に未開で未発達段階の観念だと見做すことの不当性を言うものだと理解できる。

(二) 造物主 demiruge たる岐美二神

岐美二神の一对の神々の夫婦から森羅万象が地上に産み出されていることに注目し、「世界は成熟した女性による子宮に形成されて、そこから出生したというのが日本神話の世界観だ」というコタンスキの理解は、『古事記』の世界生成観の特徴を言い当てていると思われる。そして、彼は岐美二神の本性をポーランド語で demirug（英語では demiruge 世界の形成者）と呼ぶようになった⁽⁶⁾。自身のポーランド語訳『古事記』の序文で次のよう述べている。

天の神々は評議して、正式にその二神に対して地上世界の整備と固成化とを命じた。派遣された彼らとその子孫は、生殖行為の鼓舞者の神々であった。造物主の性的行為は天地開闢の行為となり、後世の男と女のあらゆる結びつきは、世界を更新させるこの再生の行為を繰り返しているのである⁽⁷⁾。

Demiruge とは、その項目を設けた Vergilius Fern 編『An Encyclopedia of Religion』は、次のように説明している。文字通りには「人々のために働く人」を意味する職人を言うギリシャの用語。プラトン哲学では世界の創造者として使われてきていて、その意味の範囲で、グノーシス派では啓示をもたらした純粋に精神的な世界の卓越した善神と対比される物質的な悪の世を創造した劣った神格を示すために使用された⁽⁸⁾。

demiruge は、異端とされたキリスト教の一派グノーシス派で霊を肉体に閉じ込める此世の造り主とされ、神より劣る造物主とされた。ただ、コタンスキが岐美二神を demirug と呼んだのは、グノーシス的な善悪優劣の世界観とは無縁で、二神が此世の森羅万象を生んだ一对の造物主で、国土も自然も二神の生殖行為から生まれ出ていることを示したのである。コタンスキは、その日本人の世界観は一神教の人々には理解を超えていると実感し、殆どがローマ・カトリックの信者である読者のポーランド人に demirug の語を使って『古事記』の世界を語って理解を促したのである。

『古事記』序の「二靈為群品之祖（岐美二神が万物の祖となった）」を英訳本はそれぞれ

the Two Spirits became the ancestors of all things. (チェンバレン「二靈は森羅万象の祖先となった」)

the two spirits were the ancestors of all creation (フイリッパイ「二靈は被造の全存在の祖先だった」)

the two spirits became the forebears of all things. (クルト「二靈は森羅万象の始祖となった」)

と訳していて、靈は Spirit あるいは spirit と、祖は ancestors や forebears と先祖の意味の語に訳され、造物主とは訳されていない。この訳では「造物主の性的行為は天地開闢の行為」で「生殖行為が世界を維持させている」というコタンスキの『古事記』解釈は、処女懐胎でなければ聖性は伴わないキリスト教の精神風土の中で納得を得ることは容易ではない。コタンスキが生殖行為により万物が産まれる思想の説明に苦心している跡が demirge の訳語の使用に見えるのだ。

先に述べたように新渡戸稲造は、『古事記』を英訳する時、「かみ」を英語の God に置き換えると生じやすい All Mighty God (全知全能の創造神) のイメージを避けるべく kami と表示した。demirge は、日本語のカミをどのように表現すれば良いのか、多くの翻訳者が真剣に悩んできた用語の厳密化の流れの中から選ばれた一例なのである。

おわりに―『古事記』を見る視点の転換

チェンバレンとハーンとの「破られた友情」の動因には、両者の日本文化に対する西洋人の日本文化観の相違があった。チェンバレンとハーンの日本文化観は、平川祐弘氏の言葉を借りれば、「この二人は日本解釈者として対立する二大傾向を代表する」²²⁾のであった。そして、外国語訳本の中で圧倒的な知名度のある英訳『古事記』で、日本人

の世界観を知る本質的な意味をもつ重要な場面を英訳せずにラテン語で訳した奇妙な翻訳法の要因を解く鍵もそこにあつた。

幸い、チェンバレン自身がその立場を言葉にしている、その立場は、文明開化の時代の西洋人の神道観に共有されていた。その神道観は、遠田勝氏が「日本アジア協会の神道蔑視」と評した指摘が象徴している。⁷³一方、ハーンには神道を未開の信仰とする文明開化の視点はなかつたのである。二〇世紀の一九六八年のフリッパイにも二〇一四年のヘルトにもチェンバレンのような神道軽視の姿勢はない。

現代の多くの文化人類学者や宗教学者は、人間の生殖行為を未開あるいは罪とする価値観に囚われてはいない。二〇世紀は、人類学の進展により、未開社会は西洋キリスト教の前段階の未開だという西洋中心主義の解釈に対する反省が高まり、どんな社会もそれぞれ完結した文化として意味があると見做されはじめ、既述したルクレールの指摘した古代社会を「進化に取り残された生活態度しかみようとしなかつた」(九二頁)姿勢は克服されはじめ、エリアーデが「宇宙のリズムへの神秘的感情移入が特に東南ヨーロッパで農民の宗教の中核を成しているという指摘(注67)と共に「夫婦間の結合は宇宙的なリズムに統合される儀礼であり、その統合によってその行為が正当化される」と例示したように、「宇宙神話は婚姻の際だけでなく、その目的が統合的全体性の回復にある他のすべての儀礼の場合にも、模範的モデルとして用いられる」⁷⁴と述べていることが注目されるようになってくるのだ。エリアーデのその指摘は、祭りとは自然のリズムに即していたことで定着してきた、という指摘だと理解できる。

一神教の世界の人々に『古事記』の世界観を説明するとき、『古事記』におけるこの世の生成の表現が、チェンバレンのように卑猥だからと翻訳の際にラテン語等翻訳する語以外の言語で読者を煙に巻いておくか、また、未開の雑だとは否定するか、又はその文化的意味を再評価するのか、その立場をはっきりと定めることは、『古事記』を読む

者にとつて不可避の問題だろう。

その時、卑猥と断ずるのが一九世紀の西洋中心の世界観なのであって、『古事記』の翻訳過程で直面したそんな場面を、チェンバレンはラテン語の使用によって自らの訳本の中に生じる卑猥さに対応した。だが、今やそうした箇所があるがままに素直に肯定するに留まらず、宇宙生成における生殖行為の意味が見直されていることは、既に「VI『古事記』の宇宙生成観 cosmogony と生殖行為 procreation」で見た通りである。いわゆる未開社会に「理性」や「合理性」の発見を促した二〇世紀以降の人類学は、『古事記』にも新たな視点を提供した。その姿勢を明確な言葉で発している碩学として、すでにエリアーデやレヴィ・ストロースやコタンスキの指摘を紹介したが、さらに、米国の神話学者ジョセフ・キャンベル Josef Campbell (1904-87) の日本神話の評価に触れておきたい。

① 私は日本を訪れたときの経験を決して忘れないでしょう。原罪による墮落も、エデンの園もまるで聞いたことのない国です。神道の聖典のひとつに、自然の営みが悪しきものであるはずはない、と書いてあるのです。あらゆる自然な衝動は矯正するのではなく、昇華すべきである、美化すべきである。自然の美と、自然との協力に対するすばらしい関心がありますから、日本の庭園のいくつかでは、どこで自然が終わって人工が始まっているのかわからない。これはすごい経験でしたよ。^②

この言葉の理解のためには、キャンベルの次の三つの発言が参考になる。

② 現代のわれわれの宗教が抱えている問題のひとつは、それが最初の出発点から善悪の問題を強調していることです。キリストは私たちの罪を償うために送られてきた。悪の償いです。．．．私たちは神話的なテーマを解釈するときに「負債」や「償い」といった語句を使うことになったのです。ところが東洋での解釈では、借金や返済といった概念とは無関係の、「無知」と「光明」といった語句を使います。．．．エ

デンの園など存在しなかったし、人間の墮落などなかった、従って、神に対する裏切りの罪もなかったと確信する人々にとつては、まるで辻褃が合いません。⁽⁷⁶⁾

③ 世界の神話のなかで、旧約聖書の神話ほど陰鬱なものはひとつもありませんよ。⁽⁷⁷⁾

④ 宗教とは、実は第二の子宮みたいなものです。人間という極めて複雑なものを成熟させるためにそれはあるのです。自分に正しい動機を与え、自分を行動させるために。ところが、罪の観念は人を一生涯卑屈な状態に追いやってしまいます。⁽⁷⁸⁾

①の「神道の聖典」とは『古事記』と考えてよいだろう。なぜなら、チェンバレンが卑猥だとして英語に翻訳できなかった箇所『古事記』の記述にはタブーのネガティブな印象がなく、物語も楽天的な展開だと解釈できるからだ。右の①④の指摘は日本神話とくに『古事記』を想定すれば分りやすいだろう。この時、コタンスキが「岐美二神の性的行が天地開闢の行為で、後世の男と女のあらゆる結びつきが世界を更新させる行為の繰返しだ」という理解も、女性は生命を代表するものです。人間は女性によることなくしては生命を与えられません。⁽⁷⁹⁾

というキャンベルの言葉と重ねて理解できる。さらに、

女性の魔力は大地と同じように、産み、育てることですから、それは大地の魔力を支えるのです。．．．鋤が大地を耕すということで、性交のまねが支配的な神話イメージになりました。⁽⁸⁰⁾

と世界の神話について語ったキャンベルの言葉が思い出され、『古事記』の魅力の一つに禁忌のない自由な表現の描写があり、そこに、既述の通り、幸田露伴が娘に言った『古事記』は人間の秘事を綺麗に表現する方法を学べる書だという助言と夜久正雄氏が次のように言った根拠がある。

私は『古事記』から、人間の喜怒哀楽・悲喜明暗すなはち人間の情意といふものを学んだ、と言へます。人間の

情意は誰でも持っていると言へませうが、それが表現される時にはじめて自覚され浄化される。⁽⁸⁾

一九世紀、神道は道徳律のない未開の信仰と考えられて、『古事記』は露骨で卑猥な表現があるとされた、だが、二二世紀の今、その同じ部分が人の情意を率直かつきれいに表現した例だと評価されてきているのだ。

注

- (1) 以上、松井嘉和「翻訳本『古事記』に見られる翻訳法と原語の理解」(『大倉山論集』第四九輯、平成一五年)、七七〜七八頁。
- (2) 平川祐弘『破られた友情 ハーンとチェンバレンの日本理解』、新潮社、昭和六二年、三五頁。
- (3) 「世界の中の日本文化」(『世界の中の日本 I 国際シンポジウム第一集』(国際日本文化研究センター、平成元年) 一八頁上段。また、「混合と独創の文化―世界の中の日本文化」『中央公論』月刊誌・昭和六三年五月号に掲載。さらに、後掲注23の『月の裏側』には別訳で収載されている。
- (4) 馬場辰猪著・西田長寿他編『馬場辰猪全集』第一巻、岩波書店、昭和六二年、二七五頁。
- (5) 同書・参考篇、一六五〜一六七頁。本講演録は『The Journal of Anthropological Institute of Great Britain and Ireland, Vol. 6, London Tribner & Co., 1977』の転載である。
- (6) 同書、一六七〜一六八頁。
- (7) 以上に述べたタイラー以降、外国語で紹介された『古事記』の一覧は、『神道宗教』一七九(神道宗教学会、平成一二年)に発表した「『古事記』外国語訳の概観」と題した研究ノートに示したが、本稿では平成の御代以降の刊行物だけを示した。なお、近刊の『世界の「古事記」と神国日本』(神社新報ブックス二二)には明治九年の馬場辰猪の例から現在までの翻訳本の一覧表を掲載しているので、参照されたい。
- (8) 山口栄鉄『英人日本学者チェンバレンの研究(欧米日本学より観た再評価)』沖積舎、平成二二年、一一二頁。

- (9) B・H・チェンバレン、川村ハツエ訳『日本人の古典詩歌』、七月堂、昭和六二年。
- (10) 本稿では、著者と題名と刊行年代だけを訳出した。
- (11) 副題は「原名英譯古事記」。著者と訳者は「英人 チャンバーレーン著 日本 飯田永夫訳」とある。初版はチェンバレン英訳『古事記』完成六年後の明治二十二年四月。その初版本に「大賣捌所」として同勞舎出版部の名があり、翌年五月の再版本には日本文學發行所が追記されている。
- (12) 夜久正雄「『古事記』の外国語訳（承前）」（『亜細亜大学アジア研究所所報』第五八号、平成二年）二頁。
- (13) Wiesław Kotrański "Przekłady KOJIKI na języki Europejskie." (欧州の言語に翻訳された古事記)。"KOJIKI czyli księga dawnych wydarzeń. vol. I Teksty. Indeksy. vol. II komentarze." (コタンスキ全集『古事記』全二巻、第一巻 本文と索引、第二巻 注釈) p.27. PWN, Warszawa 1986の序文 Do Czytelnika (読者へ)の一節。
- (14) ドナルド・フィリップ「モザイクとしての神話―『古事記』」(村上兵衛編訳『わたしの日本文学―古事記から五木寛之』(鷹書房、昭和五二年)一九頁)。同書でフィリップとあるが、私は関係者からフィリップと聞いていたので、そう表記している。フィリップはこの短文を「日本語で書かれた最古の書物『古事記』を読むことは、私を、その後書かれた日本文学史上の他の記念碑的な作品の研究へとはみちびかなかった」と始めていて、『古事記』の面白さについて「そこにはいくつかの異種の要素が入りまじっている。そしてそれがことなる根源を示しながら、しかも、ひとつの物語に織りあげられている」と述べている。
- (15) 福田武史「書評 ギュスターヴ・ヘルト訳『古事記』」(『日本研究』五六、国際日本文化研究センター、平成二九年)。
- (16) 前掲注1「翻訳本『古事記』に見られる翻訳法と原語の理解」、四頁。
- (17) 同論文、五頁。
- (18) 新渡戸稲造全集編集委員会編『新渡戸稲造全集』第一五巻、教文館、昭和四五年、六二五頁。
- (19) 佐伯彰一『外から見た日本文学』、TBSブリタニカ、昭和五六年、七五頁。

- (20) 小花清泉『英譯古事記』に就いて(佐々木信綱編著『王堂チェンバレン先生』、好學社、昭和十三年)、一二五頁。
- (21) Basil Hall Chamberlain, "The KOJIKI, Records of Ancient Matters," the Asiatic Society of Japan, Yokohama, p. XXXiii; footnote 41, 1883^o.
- (22) 前掲注18『新渡戸稲造全集』第一五卷、六三六頁。
- (23) クロード・レヴィ・ストロース、川田順造訳『月の裏側 日本文化への視覚』、中央公論新社、平成二十六年、一一三頁。
- (24) 「わに」の語に関して、チェンバレンがわざわざ注記した個所を「日本垂細垂協会」刊の初版本1883(前掲注21)から邦訳して紹介する。
- ① (上巻) (豊玉姫がワニの姿で子供を生んでいる個所) 同書 p.127, footnote 10, 『日本書紀』の同じ物語の記述では、姫は龍 dragon に変身したことになるが、ある一書には鱈であり、この自分の解釈と明確に一致している。
- ② (開化天皇) 同書 p.167, footnote 11, 「丸邇臣：わには大和にある地名。そこには「わにざか」という埜の名前がある。わに」という語は鱈を意味するだけである」。
- ③ (崇神天皇) 同書 p.180, footnote 12, 「丸邇臣：わに(鱈)は大和国にある場所の名前」。
- ④ (崇神天皇) 同書 p.180, footnote 13, 「丸邇坂：忌瓮いほんを据えるための場所」。
- ⑤ (仁徳天皇) 同書 p.260, footnote 7, 「作丸邇池依網池：わにの池は河内国にある場所の名前。わには鱈を意味する言葉で、朝鮮人の名前に使われている」。
- (25) 佐竹昭広『古語雑談』「二色虹の虹・26 英訳『古事記』」、岩波新書、昭和六一年、四二～四三頁。
- (26) 左はチェンバレンの原文 (p. xxxvi) と佐竹氏がこの冒頭を引用した邦訳『日本上古史評論』(前掲注11、六三頁)の部分。
- The words relative to colour which occur are: - Black, Blue (including Green), Red, Piebald (of horses), White. / Yellow is not mentioned (except in the foreign Chinese phrase "the Yellow Stream," signifying Hades, and not to be counted in this context), neither are any of the numerous terms which in Modern Japanese serve to distinguish delicate

shades of colour: We hear of the "blue (or green), (ie. black) clouds" and also of the "blue (or green), sea"; but the "blue sky" is conspicuous by its absence here as in so many other early literatures, though strangely enough it does occur in the oldest written monuments of the Chinese.

又色の名の古事記に見えたるハ、黒・青(緑をも含めり)・赤・班・白等なり。黄色のことハ記載せしことなし(幽冥を顯ハしたる黄泉なる漢語の外にハ)其ノ他近世日本にて物色の精密なる區別を爲すに用ゐる所の語多しと雖とも記中更に其名稱を記載せしものなし。又記中青(緑細言すれば黒)雲及び青(即ち緑)海などの語見ゆといへとも青天と云ふ言ハ多く支那の古書にあれとも古事記其ノ他の古書に見あたらず。

(27) 前掲注21 "The KOJIKI. Records of Ancient Matters," p.148, the Asiatic Society of Japan, 1883.

(28) 同書 p.148, footnote 21.

(29) 西宮一民校注『新潮日本古典集成 古事記』、新潮社、昭和五四年、一二二頁。

(30) 牧健二『近代における西洋人の日本理解』、清水弘文堂書房、昭和四四年、一頁。

(31) 佐々木信綱「バジル・ホール・チェンバレン先生小傳」(佐々木信綱編著『王堂チェンバレン先生』、好學社、昭和三三年)、一一頁。

(32) 前掲注18『新渡戸稲造全集』第一五卷、六二六頁に掲載されている注2の拙訳。

(33) 遠田勝「小泉八雲―神道発見の旅」(平川祐弘「小泉八雲 回想と研究」、講談社学術文庫、平成四年)、四二二頁。

(34) "Yaegaki-Jinja," in "Glimpses of Unfamiliar Japan," 引用は1973年初刷のRinsen Book Co., Kyoto, Vol. I, pp.340-342の第三刷1991より。なお邦訳が平川祐弘訳「八重垣神社」(小泉八雲著、平川祐弘編『神々の首都』、講談社学術文庫、平成二年、二二二―二三四頁)にある。筆者が校合したもう一個所は、「The Household Shrine」の目弱王の物語の引用個所で、同じく "Glimpses of Unfamiliar Japan," vol., p.340, Rinsen Book Co., Kyoto 第三刷1991。邦訳は遠田勝訳「家庭の祭屋」(『神々の首都』) 三四〇―三四一頁。

(35) 前掲注13 Wiesław Kotarński "Przekłady *KOJIKI* na języki Europejskie" p27. 以下「天皇のすゝての息子を《kings》と訳している機械的な翻訳」という指摘もあり、その実例もあげられているが、本文の七六頁で引用した孝靈天皇の条でも御子の意味の「王」をkingと訳すなど、その事例がある。

(36) 前掲注19 『外から見た日本文学』、七五頁。

(37) 前掲注21 Chamberlain "KOJIKI"の原文 (p.iii) と前掲注11 『日本上古史評論』(四〜五頁)の飯田永夫のその部分の邦訳は次の通り。

The "Records" sound queer and bald in Japanese, as will be noticed further on; and it is therefore right, even from a stylistic point of view, that they should sound bald and queer in English. The only portions of the text which, from obvious reasons, refuse to lend themselves to translation into English after this fashion are the indecent portions. But it has been thought that there could be no objection to rendering them into Latin. -- Latin as rigidly literal as is the English of the greater part.

古事記へ後にも論するか如く、其ノ文体華美を旨とせず、妙に朴素の調子なれば英語にうつすもまたしからざるをえざるなり。原書中にて故ありて英語もて譯するを厭フ所あり。其ハ不良の部分なり。永夫曰不良の部分とハ猥雑と思へ。然れとも其を羅彼の二尊の妍哉云々の部分ならん。 然れとも其を羅句語に譯シなバ亦之レを非難する者あらざるべしと思へり。

(38) 倉野憲司校注『古事記』、岩波文庫、昭和三八年、一二四〜一二五頁。

(39) 前掲注23 『月の裏側』、一一二頁。

(40) 前掲注19 『外から見た日本文学』、七五頁。

(41) 前掲注2 『破られた友情』、三五頁。

(42) G・ルクレール、宮治一雄・宮治美江子訳『人類学と植民地主義』、平凡社、昭和五一年、一五五頁、一七四頁。

(43) 前掲注19 『外から見た日本文学』、七八〜七九頁。

- (44) 前掲注2 『破られた友情』、五九頁。
- (45) 前掲注30 『近代における西洋人の日本理解』、一頁。
- (46) 前掲注31 「バジル・ホール・チェンバレン先生小傳」、一三頁。
- (47) 築島謙三 『ラフカディオ・ハーン（小泉八雲）の日本観とその正しい理解への試み』、勁草書房、昭和三九年、七二、七六頁。
- (48) チェンバレン 「王堂先生遺文ラフカディオ・ハーン」（前掲注31 『王堂チェンバレン先生』）一〇三頁。
- (49) 前掲注30 『近代における西洋人の日本理解』、八二〜八三頁。
- (50) 同書、一二四頁。
- (51) 前掲注47 『ラフカディオ・ハーン（小泉八雲）の日本観』、二八四頁。
- (52) ジョージ・ベイリー・サンソム著、金井圓・多田実・芳賀徹・平川祐弘訳 『西洋世界と日本』上、ちくま学芸文庫、平成七年、三三二頁。
- (53) 前掲注47 『ラフカディオ・ハーン（小泉八雲）の日本観』、四三頁。
- (54) 以下三ヶ所の引用は、小泉凡「小泉八雲が歩いた『古事記』の世界」（池田雅之・高橋一清編著『日本人の原風景Ⅰ 古事記と小泉八雲』、かまくら春秋社、平成二五年）一〇六〜一〇七頁。
- (55) 牧野陽子「解説」（平川祐弘編『神々の国の首都』、講談社学術文庫、平成二年）、三八五、三八七頁。
- (56) 池田雅之「生きるよすがとしての神話」（前掲書注54池田雅之・高橋一清編著『日本人の原風景Ⅰ 古事記と小泉八雲』）八五頁。
- (57) 西郷信綱『古事記研究』 未来社、昭和四八年、二九九頁。
- (58) 前掲注33 「小泉八雲―神道発見の旅」。また、前掲書注47 『ラフカディオ・ハーン（小泉八雲）の日本観』 参照。
- (59) 松井嘉和「『古事記』と『神典』」（『大倉山論集』 第五三輯、公益財団法人大倉精神文化研究所、平成一九年）三七頁。

- (60) 前掲注18『新渡戸稲造全集』第一五巻、六二七頁。
- (61) フレーザー著、永橋卓介訳『金枝篇』(一)、岩波文庫、昭和四一年、二八六頁。
- (62) 同書、二八九頁。
- (63) 小口偉一・堀一郎監修『宗教学辞典』、東京大学出版会、昭和四八年、四二二頁。
- (64) エリアーデ著・堀一郎訳『大地・農耕・女性―比較宗教類型論』、未來社、昭和四三年、一〇七頁。
- (65) エリアーデ著・堀一郎訳『永遠回帰の神話 祖型と反復』、未來社、昭和三八年、三八―三九頁。
- (66) 同書、三九頁。
- (67) エリアーデ著・中村恭子訳『エリアーデ著作集 第七巻 神話と現実』、せりか書房、昭和四八年、一九一―一九二頁。
- (68) 前掲注64『大地・農耕・女性』、一〇八―一〇九頁。
- (69) W・コタンスキ、『Dzielnictwo Japońskich Bogów』〔日本の神々の遺産〕、Osolińskich, Warszawa 1995。
- (70) W・コタンスキ、松井嘉和訳『日本の天地開闢説』(「神道及び神道史」第四二・四三合併号、神道史学会、昭和六〇年、のちに國學院大學神道史学会編『西田長男博士追悼論文集 神道及び神道史』(名著普及会、昭和六二年、五二三―五六九頁)に再録)。原文 Wiesław Korański, "Kosmogonia Japońska," in "Euhemer" No.3, 及び "W Kręgu shintoizmu (2)" (神道宗教をめぐって論集) Wydawnictwo Akademickie DIALOG, 1975に再録。
- (71) "An Encyclopedia of Religion," edited by Vergilius Fern, Philosophical Library, New York, 1945。
- (72) 前掲注2『破られた友情』、九頁。
- (73) 遠田氏はその特徴を「明治七年、日本アジア協会での神道論議は二本の柱からなっていた。一つは、神道が民衆の信仰を失って久しい過去の遺物であるということ、いま一つは、従って維新前後の御門崇拜と国家神道は、新たに作られた政治イデオロギーにすぎないということである」とまとめている(前掲注33「小泉八雲―神道発見の旅」、三七二頁)。
- (74) 前掲注65『永遠回帰の神話』前者の引用は三八頁、後者は三七頁。

- (75) キャンベル、モイヤーズ、飛田茂雄訳『神話の力』、早川書房、平成四年、六五頁。
- (76) キャンベル、飛田茂雄訳『時を超える神話』、角川書店、平成八年、二九頁。キャンベルはまた前掲注75『神話の力』で、「聖書に基づく自然断罪の観念・・・神は自然から分離されている。自然は神によつて呪われている。ほら、『創世記』にも書いてありますよ。われわれ人間が世界の支配者にならないければならない、と。」(七九頁)とも述べている。原文は“the biblical condemnation of nature・・・God is separate from nature, and nature is condemned of God. It's right there in Genesis: we are to be the masters of the world.” J. Campbell, “The Power of Myth with Bill Moyers,” p40, Anchor Books, New York, 1991.
- (77) 同書、七〇頁。
- (78) 前掲注75『神話の力』、一一二頁。
- (79) 同書、九九頁。
- (80) 同書、一八八頁。
- (81) 夜久正雄『古事記のいのち』、国民文化研究会、昭和四八年改訂版、一七頁。